みなみ　創刊号

遥かなる日の追憶のために

長崎県立長崎南高等学校生徒会誌

昭和３９（１９６４）年７月２０日発行

発行所　県立長崎南高校・生徒会

編集,発行・責任者　平野 伸人　中田 満智子

復刻版　平成 31(2019)年 3 月 22 日・旧職員、山田康弘・謹写

表紙

みなみ　創刊号　長崎県立長崎南高等学校生徒会誌

写真（校舎全景・航空写真）

校歌・・・・・・・・・作詞・福田清人、作曲・沖不可志

一、文化の潮　長く流れて
　歴史ゆかしき　崎陽の丘は
　生気みちて　霧晴るるところ
　かぐわしく　若き血燃えて
　学びの庭に　よろこび集ふ
　ああ　我等が長崎南
　強く讃へん　母校南

目次

Ⅰ、巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(1)・②
生徒会誌創刊号に託し第一回卒業生に送る　学校長　古川憲介
生徒会誌創刊にあたり　生徒会長　平野伸人
在校生の皆さんへ　PTA会長　隈部登馬男

Ⅱ、先生より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(6)・④
大脇勘治
梅田和郎

Ⅲ、旧役員より・・・・・・・・・・・・・・・・・・(7)・⑤
心に去来したこと　原口義和
森田久美子
二期生徒会役員をつとめて　七里成徳
生徒会役員を体験して　川崎義昭

Ⅳ、クラスだより・・・・・・・・・・・・・・・・・(13)・⑧
一年七組、一年八組、一年九組、一年十組、一年十一組、二年一組、
二年二組、二年三組、二年四組、二年五組、二年六組、二年七組、
二年八組、三年一組、三年二組、三年三組、三年四組

Ⅴ、クラブだより・・・・・・・・・・・・・・・・・(36)・23
運動部　卓球部女子、バレー部、剣道部、バスケット部、卓球部男子、
陸上部、庭球部、山岳部、ラグビー部
文化部　生物部、演劇部、芸術部、茶道部、文芸部、JRC

Ⅵ、一年間を顧みて・・・・・・・・・・・・・・・・(51)・33
回想録　会長　平野伸人
僕の生徒会活動　副会長　中村均
考えること　〃　中田満智子
人を求めて　会計　山下裕人
役員生活一年間　〃　伊藤正
雑感　書記　山田恭子
書きたいことウンヌン　〃　村尾久子

Ⅶ卒業生の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・(61)・39

Ⅷ卒業生に贈る言葉・・・・・・・・・・・・・・・・(67)・43

Ⅸ先生方の住所・・・・・・・・・・・・・・・・・・(68)・43

Ⅹ長崎県立長崎南高等学校の歩み・・・・・・・・・・(70)・44

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(75)・46
○・・・・・・・・・・・・・第三期生徒会役員一同
おわび・・・・・・・・・・・・・編集委員　中田満智子

目次・おわり

Ⅰ、巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（1）

P1・2・3・巻頭言

生徒会誌創刊号に託し第一回卒業生に送る　学校長　古川　憲介

　第一回生諸子の卒業を記念する生徒会誌創刊号の企画に伴い、役員諸君に請われるまま、この一文を草し、諸子の首途を送る言葉といたします。

　御卒業おめでとう、心から諸子の輝やかしい首途を祝福致します。私は今三六年四月、本校が新設校であるため、諸子の大部分が複雑な気持で列したであろう、入学式の情景を思い浮べております。私は壇上に立ちながら、御父兄の不安そうな眼と、諸子の希望をこめたつぶらな眼を見つめながら、我々の急務は一刻も早くこの不安を取り除き、安心して任していたゞける信頼を克ち得ることであると固く肝に銘じました。そのためには施設設備の急速な整備と共に、我々の指導の熱意を傾けその効果を早急にしかも着実にあげる以外にないと感じました。そして幸いに、小倉高との比較試験も中地区との比較においても着々と期待した成績に裏付けられ、校舎も又その設備も、御父兄のこの上ない御協力によって諸子の卒業を前に完成させていたゞき一班の責めをふさぎ得たと心ひそかに喜んでおります。

　諸子は今、あるいは実社会に、あるいは、更に進んで大学の入試を目前に控えていますが六月の不安も払拭し、十一月旺文社模試と第二回県下模試に示された成績は上位下位の別なく、十分自信を以て、入試に臨んで貰って大丈夫と考えております。就職も、殆ど全員立派な職場が得られる見通しを得ました。そしてその上に力強いことには、諸子につづく二年生の諸子の頼もしい許りの層の厚い良好な成績を得た事であります。卒業諸子には後顧の憂いなく、最後の仕上げに専心破らずばおかない執念と気力を以て難関の突破に立ち向われんことを望みます。

　吾々が「初心忘るべからず」を第一句として、高邁な理想をかゝげ飽くことない情熱とどんな困難にも打ち克つ旺盛な気迫を強調し、スポーツの振興と自律の学習の両立を望み、服装と礼儀の端正を要求し品位ある学徒たれと励ましつゞけて来ました事は、諸子には生活に厳しい節度を要求し又学業への集中的努力を強要する事となり、馴れない間は諸子に息づまるような圧迫感を感じさせた事も事実でありましょう。然しその効果は次第に上りつゝあると考えていますのは私だけの己惚れでしょうか。第一年目におけるバレー部切ベスト８の獲得、二年目のラグビー部の、これまでの覇者長崎工高への肉迫、そして三年目終りではあるとは云え、諸子につゞかんとする一、二年の諸君によりラグビー、バスケットは優勝の目途を得るまでになりました。その他柔道、バレーも近い将来が楽しめるまでの力をつけてまいりました。

　又文化部においても、文芸部高塚君の小説入賞その他文化祭における各部の展示はその豊かさを加えてまいりました。私は三十六年東高の文化祭を見、さすがにその豊かさを羨しく思ったものでしたが三年の現在を待つことに急でありすぎた事を恥しく思っています。

　これらの基礎がすゝきの丘に唯一棟あった管理棟の時代に入学し八台のドーザの騒音と威力の前に掘り起されて行く校地拓きの情景を目のあたりに見ながら引きつゞく建築の騒音にもめげず、いやその開拓と創造に力強い何物かを体得しつゝ黙々と創成の歩みを培ってくれた諸子の努力の跡にすえられねばならないことは、吾々職員はもとより諸子につゞく在校生諸君のひとしく首肯する所であります。

　本当に良くやってくれた。御苦労様と心から感謝と敬意を表するものであります。しかも諸子の歩もうとするこれからの道もそれが実社会であれ、大学であれ、すべて南高卒業生としての初めてその足跡を遺すもので開拓の責任はどこまでも諸子におおいかぶさっていることを思うとき本当に相済まない気持ちになりますが、諸子には「本校第一回卒業生」の誇りをもって堂々の歩みを進めていただきたいものと思います。諸子につづく在校生諸君も諸子の指導を体し学習の成績に体育・文化のクラブ活動にいよいよ向上の巨歩を進めてくれるであろうことは期して疑う

を要しません。そして諸子が示してくれるであろう大学進学の成績と職場での信頼は在校生諸君の研鑽と共に本校の輝やかしい伝統と歴史をうち立ててくれるであろうことを信じて疑いません。

卒業生諸子よ歓喜に酔われる時も、障碍にひしがれそうなときも又失意にくぢけられようとするときも、諸子が三年の春秋を過ごされた「希望が丘」の白亜の校舎とその中に学習する千五百に余る若い後輩諸君のかくれた支持と温かい包容のあることを誇らかに思い出して下さい。そして度しげくこの丘を訪れ、後輩諸君を励まし恩師と温かい歓談を楽しまれることを望みます。

終わりに諸子の前途に幸多かれと祈り、諸子の健康を祈って、諸子を送る言葉を結びます。

昭和39年(一九六四)一月26日

P4・生徒会誌創刊にあたり

生徒会長　平野伸人

新入生を加えた生徒会も会員数一六〇〇名堂々たる名実ともに内外に誇り得る生徒会になった感がする。予算も二五〇万円という大金になった。一年生の方にオリエンテーションの時、わずか二五〇万ばかりとか何とか、大きなことをいったが実際ギョッとする額である。それだけに我々の責任を痛感するのである。さて僕としても卒業された一回生の方々にお祝いなり、在校生としての花むけの言葉なりをおくろうと思ったが、南高新聞等に寄せましたのでここではぶきます。

自分や他の役員連の回想になるとついぐちることもあるが、皆いい奴ばかりでした。生徒会誌を発刊するにあたって、会員の皆様にあらためて生徒会というものをじっと見つめてもらいたく思います。その目的の意味をもつ発行なのです。三年間の〝南〟の歴史は、たとえ歳月は短かくとも、ずっしりと重く根を下している。生徒会においてもだが、基礎作りという段階は終ったという感がする。もはや会の発展を妨げることは、何人においても許されないはずだ。後はもう会員一人一人が生徒会というものをしっかりと手元にすえておかねばならぬのだが、それが一番むつかしいことの様だ。

推進となる本部役員をあらためて紹介します。会誌によって三年間をふりかえって下さると共にあらためて我々現本部を批評し、心にとめてほしいと思うのです。

まず僕の両のウデ、副会長の中村君、中田さん、書記の村尾さん、山田さん、会計の山下君、伊藤君、そして会長の僕の七名。顧問の先生は田中、井元先生。議長の池崎、辻田両君に小川さん。「無言実行」「不言実行」もよいが生徒会活動はこれではだめ、よく言い・よく実行する。

よく言われた連絡不十分。いちばんいたい所だ。だからモットーは「有言実行」。高校生活もあと一年あまり。任期を終えると表面に立たなくなろうが、いつまでも南高生徒会をみまもっていこうと思う。我々の一つの思い出として、第三次生徒会本部の記録として、会誌はよき足跡となろう。会員の皆さんの素直な意見がききたく思い、よく投書箱を開いたり、聞きまわったりもしたが、完全に理解されなかったこともあったりしたので、もっともっと意見が本部に寄せられんことを期待してペンを置き、生徒会誌創刊にあたっての言葉と致します。

S39・4・3

P5・在校生の皆さんへ

ＰＴＡ会長　隈部登馬男

〝石の上にも三年〟という言葉がありますが、南高校が誕生してから早くも三年の月日がたち、去る十九日をもって歴史的第一回卒業式典が行われました。まことにご同慶の至りです。

かえりみれば、南高が開校された当時は、わずかに一期生を収容する一棟だけの校舎でそれも草ぼうぼうたる荒野の一軒家という感じでした。その校舎の外では、校地の造成に協力して特別に自衛隊からくり出された一〇台ものブルドーザーが、毎日のように物すごい轟音をたてゝいました。そうした騒々しい環境の中で、一〇名そこそこの先生たちはますます教育に情熱をかたむけられ、生徒もまた〝一期生〟としての自覚と誇りをもって勉学にいそしんで来たのです。

そこには、先生と生徒が一丸となって、幾多の先進校に追いつこうとする不屈の〝フロンティア精神〟がみなぎっていました。あの頃の先生や生徒の苦労というものは言語に絶するほどで、今の在校生の皆さんには想像も及ばないことでしょう。

思えば、荒野の〝一軒家〟は今日かような堂々たる大校舎に発展し、その内容外観を誇る近代的諸施設には目を見張るばかりです。体育館や運動場の構えに至っても〝九州第一〟の折紙がつけられているのです。

最も大事なことは、皆さんの学業成績が最近飛躍的に向上して識者の注目を集めているという事実です。

しかも欣快に堪えないことは、先日の県下高校ラグビー大会で新進の南高が幾多の強豪を倒して堂々と優勝したことです。開校わずか三年で、今やわが南高が智育と体育を両立させつゝ一流高校にのし上がったということは驚嘆すべき事柄ではないでしょうか。

これはもとより熱誠で有能な諸先生の愛情こもるご努力のたまものであり、わけても開校の当初から、建学途上に横たわる諸困難と斗いながら数々の重責を果たして来られた古川校長先生と、堤事務長先生の偉大な功績は永久に校史の第一頁を飾ることでしょう。

古川校長先生は、あの記念すべき第一回卒業式の壇上で、さすがに感極まって涙を流されました。それは〝生みの苦しみ〟と〝育ての喜び〟を以って真剣に体験した人だけが流し得る感激の涙だったのです。

在校生の皆ざん！皆さんは、過去三年間、母校の〝パイオニア〟となって巣立ち去った第一期生諸先輩に続いてよりよく学び、よりよき校風を作興して下さい。そして光輝ある伝統へのバトン・タッチャーとなって下さい。ＰＴＡ一同は心からそれを祈っております。

ロ、先生より・・・・・・・・・・・　大脇勘治・梅田和郎・・（６）

Ｐ６・大脇　勘治　先生（国語）

二十日、東高の卒業式に校長の代理として参列した。その時のある父親が「東高に合格して親子一緒になって、感涙にむせんだ。赤飯をたいて祝った。」と言った。南高第一回生の君らは全く違った複雑な感慨をもって入学した。喜びにあふれる中学の同級生と袂を分って入って来た君らには、大いなる夢をいだき、新しい希望にもえていた者もあったが、不幸でつまらなそうな顔つきの者も多かった。設備が整っても当り前だと考える者もいた。広島隊長は「生徒はおとなしい。はりきっているのは先生ばかりで、生徒はシュンとしている。」と評したこともある。

今更こんなことを書いたのは、当時の苦悩をのり越えて来た君らの成長をふりかえると共に、何回か不安を感じ、躊躇した自分自身を見直して、感慨を覚えるからである。

私はかつて思ったことがある。「南高一回生を、新設といえども、試作品としてはならぬ。今までの経験を通して、全心全霊を尽して仕上げねばならぬ。」と。全く悔いなしとはしないが、もはや手をはなれた。三年間を共にし、第一回生の主任という光栄を担うと同時に、責任の重さを痛感する。

卒業式で呼名しながら、一人一人にこの三年間の成長がひしひしと感じられた。創設の南高に入って、自分の思うままにならぬ時の苦しさに堪えることが出来た。温い庇護のもと、あまえながらも責任感を言うことができた。続々と連る後輩の先導者としての義務感も心に銘記したはずである。南高第一回生として雄々しく社会に飛び立て。

〝仰ぎ見る　南高に光満ち　みなと長崎　朝ぞ明けゆく〟

Ｐ６・梅田　和郎　先生（社会）

ゴーゴーたる騒音と共に、ブルドーザのカタビラのつめ跡が、あらわになった赤土のあとに刻みこまれている。自衛隊員の努力が、少しづゝではあるが山はだを崩し、谷をうめて広い台地を作ってゆく。

丁度、三年前、この土地は、そんな作業がくりかえされていた。そこには文化の夜明けの響きがあったんだろうけれど、僕らには荒々しい騒音と堅い鉄の動きだけが感覚的にせまってくるだけであった。しかし、

そのおしつぶされた底でなおみどりの芽は芽ばえつゝあったのである。そして、それが現在の南高校の幼い姿であったことを思うときに、誰だって、歴史の偉大さと、集団の人類の努力の姿を感じざるをえない。生徒会誌の発刊は、物的な堅さに、みづみづしいうるおいを与え、凹凸をつけ、個性あるものとしての生命を宿すという意味で渇望したものである。

人間が考えるという点で他と区別されているとすれば、集団としての生徒会も、この人間の条件を満足させねばならない。生徒会誌の内容と方向は、新しい時代の感覚に適応した、また、その方向を示す法とならねばならないであろう。

南高校の教訓に、「理想は高く気魄と情熱にもえよ。更に、自主自律一意学道に精進せよ。」と、つゞいている。僕らがあらためて云うまでもなく、この教訓の精神にそって、高い格調と個性ある会誌になってゆくことでしょうが、僕らも、生徒も共に総合された南高校をうつし出す鏡として生徒会誌をそだてていきたいと思う。

四、旧役員より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(7)

心に去来したこと　原口義和
・・・・・・・・・・森田久美子
二期生徒会役員をつとめて　七里成徳
生徒会役員を体験して　川崎義昭

P7・8・心に去来したこと　原口　義和

「光陰矢の如し」、これはもう使い古された言葉ですが、古人は非常にうまいことを言ったものだと感心します。まさにその通りで、私達が南高に入学して早くも三年の才月が流れようとしています。三ケ年の高校生括を無事に終え、卒業を前に、生徒会役員の方から、「三ケ年の体験談を」と頼まれ筆を取った訳です。

私、否・私達とした方が良いかもしれませんが、最初南高入学が決った時、「回された。」という感を強くしたものでした。はじめから南高を希望して来た人は一人もいなかったと言っても過言ではないと思います。実際、入学した当時、校舎といえば、現在のB棟（管理棟）だけ、周囲は畑地、運動場は、「猫の額」より狭く、ソフトボールさえも出来ず、雨が降れば、体育は玄関ホールでという状態でした。それが現在はどうでしょう。普通教室棟及び特別教室棟も完成し、施設・備品は九州一を誇り、運動場は、ラグビーの公式試合場となる程の広さを擁し、雨が降れば、大きな体育館でのびのびと運動出来るという、これ程までに完成したのです。今から後の南高生徒は本当に幸福です。さて、再び過去に目を移してみます。

私が南校初の生徒会長に指名されたのが、昭和三十六年四月の中旬だったかと思います。はじめは安易な気持で承諾したのでしたがそれからの一年というものは、全く「語るも涙、聞くも涙の物語」（これはちょっとオーバーかな？）でした。幸い、生徒会規約は準備委員の方たちが作成されていたので助かりましたが、クラブ編成・予算の作成など手慣れない仕事のため、大分他の役員・会員に迷惑をかけながらも、無事にすませることが出来た時は、本当にうれしいものでした。

九月、本校第一回の生徒会役員選挙に立候補し、多くの不信任の評を受けながらもどうにか当選。この時ばかりは、過去五ケ月間、何のために苦労したのか？とばからしくなったものでした。第一回の創立祭（文化祭・体育祭）も、校歌・校旗の披露と共に無事にすませ、生徒会規約の修正、改正を行い、議会運営録の作成・週番細則・次年度への暫定予算の作成等いそがしい毎日でした。このようにして、二年目を向かえ、六月二五日、二代目の内島君へとバトンタッチをしたのでした。

生徒会の活動にとって評議会・生徒総会は欠くことの出来ないものです。事実私が任期中数多くの会議を開きました。しかし全員参加の評議会が開かれたのは、私の記憶にはありません。役員・会員への連絡の不徹底が第一の原因でした。そのため、生徒会専用の掲示板を作るよう、

学校側にも交渉し、本年度（三十八年）にやっと設置されました。今後は、この掲示板を最大限に利用し、一人の欠席者も出ないよう努力していただきたいと思います。

生徒総会について言うならば、初年度の総会は、ヤジではじまり、罵倒で終るというひどいものでした。現在の一・二年生の方は御存じないことですが、確かに、ひとつの原因は本部役員にあったかもしれませんが、南高の発展を本当に望む人（母校の発展を望まない人はないはずですが）ばかりであったなら、あれほどひどいものにならなかったろうにと思います。

中学時代の生徒会役員の経験から、生徒会役員になるなら副会長をと思っていた私でしたが、心ならずも生徒会会長に、しかも新設校のそれに推薦された私でした。ただでさえつらい会長の職務なのに、新設校というハンディの上に立つ会長のつらさ、みじめさというものは、とても筆では表現し得ないということを最後に託したいと思います。

全てのことを「一」からやりはじめた長崎県立長崎南高等学校生徒会も二年目を迎え、そして過ぎ去ろうとしている。一応の基礎は、完成したものと思ってよい。これからは、この基礎を基礎にして、大きく飛躍して行く時期である。生徒会の発展＝南校の発展＝自己の完成ということを第一に考え、生徒会に関心をもち、生徒会活動に積極的に参加してもらいたい。

最後に後輩諸君へ一言。まず生徒会役員の方に。

一、会員への連絡を早く確実に。

二、どんなにつらい時でも、自己の完成のためと思え。

つぎに会員の方へ

一、生徒会活動には、自分から積極的に。

二、生徒総会に出ることを義務だと思わず、権利だと思え。

以上のことを申し上げて筆をおくことにする。

何かとりとめのないことをだらだらと書いてしまったが、これでも生徒会発展のための一助けにでもなれば幸いです。

P9・森田　久美子

生徒会役員になってどうであったか、いざ書くとなるとなかなか書くことができない。それでも役員をしていてたび／＼感じたことをここに書いた方が良いと思うのでそうすることにする。

生徒会の役員とは、実際私が役員の立場にないときはあまりにもその内容が漠然としており、又ずっと遠いところに存在しているような気がして、それに協力することもあまりしなかった。だから生徒会の行っていることも本気で一生懸命やったことがないように思う。

さて自分が役員側の立場になってみると、私がかって思っていたように他の人もそうなのだろうか、それとも又ちがった考えをもっているからなのだろうか。「自分達の生徒会なのだから自分達でうんと盛り上げていかなければ」というような考え方を持っていてしかもそれ、を実際の場になって役員側と一緒になって学校を盛り立ててくれる人が一体どれくらいいるだろう。例えば、たびたび開かれる評議会にしても、当然その人が出席しなければならないのに会には全然参加しない。そういう人が多いもんだから、評議会の規定の人数に足りなくて流れてしまったことが何度もある。

現在の評議会はどうだろうか、まえのそれのようだったら評議員の人々は、ちょっと考えてもらいたい。一体誰のための評議会なのか。思い出して書くとたくさんあるけれど例はこのくらいにしておく。

私は生徒会役員というものをやってみて、役員の苦労というものがわかり、生徒会のあり方とは一体どうあればよいのか少しは分ったつもりである。選挙の時にはいつも立候補者が少ないけれど、たくさんの人が役員をして、真の生徒会というものを分ってもらいたい。これからの南高の生徒会の発展を願って筆を置くことにします。

P10・二期生徒会役員をつとめて　七里　成徳

私が生徒会役員をして一番つよく感じたことは「会員と役員とは一体

であらねばならない。」ということです。こんなことあたりまえだと思われる人が多いでしょうが、あたりまえのことが、私が役員をしていた頃は忘れられがちであったようです。

たとえば総会が開かれるときですが、役員は「総会でもんくが出んようにせんばいかん。」と言いながら準備をするし、会員は「役員ばいっちょこまらしてやるか。」といって役員のささいなあやまちを、大げさに攻撃する。まるで代議士気どりです。総会にかぎらず、こんなことは評議会や、その他の委員会でも見うけられました。もちろん全部がこんなことをするのではありません。ごく少数の人によってなされることですが、これが生徒会活動の大きな障害となるのです。

そこで生徒会の運営をスムーズにするにはどうしたらいいでしょうか。私は会員と役員とが一体となってやればきっとうまくいくと思います。すなわち役員は「もんくが出んように。」ではなくて、「会員全体の向上のために。」ということを一番に考えておるのです。たとえば予算をくむときでも、大きく全体を考えてくむのです。そうしてできた予算こそ会員のみんながなっとくのいくものになるのではないでしょうか。

又会員の方でも「こまらせてやろう。」ではなくて「おれたちの生徒会だぞ、おれたちが育てなければならんのだ。」という意気を持って、どしどし意見をのべてくれれば役員の方でもその真意をガッチリとうけとれるのではないでしょうか。そうしてはじめて、今までしばしば問題になってきた「会員と役員とはどうしたら一体となることができるだろうか。」ということに対するはっきりした解答が出てくるのだと確心するのです。

公立高校の生徒会活動はだんだん不活発になりつつあります。受験でいそがしいのでしょう。生徒会廃止論さえ出ているところもあると聞きます。でも我々南高の生徒会、苦心してここまで育てあげた生徒会です。今後も困難もあるでしょうが、みなさんは生徒会における自分の立場を自覚してよりよい生徒会づくりにはげんでいただきたいと思います。

P11・12・生徒会役員を体験して　旧副会長　川崎　義昭

時は去る昭和三十六年、秋もなかばの十月の或る日、つれづれなるまに一年四組の教室（現在のB棟一一〇）の教室の前に立っていた。すると会長の原口君と副会長の内島君の二人がツカツカと私の前に寄ってきて言ったのである。「川崎君、書記になってくれんね。」と。私は一瞬胸がどきりんこんとした。私はすぐに断わったのであるがついに何度もの説得に屈服させられてしまった。それが私が二年間も役員を務める運のつきとなったのである。役員になった当初は不安でならなかった。いったい自分のような無能の人間に何が出来るのだろうか。まだ、やっと若芽を出したばかりの南高生徒会は生徒会をまっすぐ成長させることが出来るだろうか。こんなことばが私の脳細胞にこびりついて離れなかったのである。ところが数日後、議事録の始めの方をあけてみて頭が下がる思いがした。というのは、生徒会会則案について修正された点、第一章総則、第三条、本会は本校生徒会員で構成する。したがって、全生徒が会員としての権利をもつとともに……。といったような文章がサラリサラリと書かれてあった。

私は貴重な時間を費やして毎日のように評議会を開き綿密に検討されて現在の生徒会会則が出来たのだということを始めて知ったからである。白紙の状態から出発した南高生徒会にとって規約を作ることは、非常に困難なことであったにちがいない。生徒会会則その他の規約作成にあたられた方、本当に御苦労様でした。（後輩諸君、先輩にはこのように生みの苦しみがあったことを忘れてはなりませんぞ。）こんなわけで私はこの人達の苦労によって動き出した南高生徒会をもっともっと成長させねばならないという任を感じました。そして「よし書記をやってやろう。」という気が湧いてきたのである。

最初、評議会に出席して驚いた。評議会開会の時間になっても評議員があまり集まっていないのである。私はこれまでの評議会開会のときにこのような現象がみられたのではないかと思って少々がっかりしました。

このように、評議員の出席が遅れることは役員にとって悩みの種となったのである。なにがなんでも評議会が開くことの出来る最低数まではこぎつけなければならない。このために、役員は評議員集めに走りまわったことが何度かありました。このようなことは討議の時間が少なくなり何度も評議会を開かねばならないようなことになったり、特に議題が総会にかけなければならないような問題だったら総会の延期というやっかいなことがおこる原因になる恐れがあるので注意しなければならないと思います。

私は前に「書記をやってやろう。」という気になったと述べましたが実際、役員を務めてゆくうちにだんだんいや気がさしてきました。というのは生徒の生徒会に対する関心が薄く役員だけの空回りになっているように感じてきたからであります。が、まあどうにか書記の務めは果たせたように思います。私は書記を経験したので役員になろうという気は毛頭なかったのでありますが改選の時期になっても立候補者がなかったので顧問の先生から副会長をやってみないかと言われ副会長をひきうけたのである。（内心、副会長は楽だという安易な気持もないではなかったが）実際やってみていままでとはちがった苦労があった。

その第一は予算編成である。予算編成といっても暫定予算あり補正予算あり本予算あり種々である。中でも特に気をつかうのが申すまでもなく本予算である。生徒会誕生二年目にして、最初予算請求書を提出させ、それから査定委員会を開いて決定するという方法をとったのであるが、なるべく請求額を削ってもらいたいという切なる希望をいだく査定委員と、とれるだけとろうというがめつい気持をいだいている各部長との白熱した議論の展開も何度かみられたことでもわかるように予算を決めることはなかなか容易なことではないのである。

第二に苦労が多いのが総会開会である。全生徒に充分理解してもらうように資料をプリントするのであるが、これが何千枚となるとなかなか大変である。しかし、いったん総会が終るとなんともいえない気持になるのである。いままで苦労して討議したことがみんなに承認されたかと思う一段落したようなほっとした気持ちになるのであります。

今まで苦労談ばかり述べたてきたようですが、今考えてみまするに、役員を経験したことは自分にとって表面にはあらわれてこないが、なにかしらプラスになったものがあるように思います。最後に後輩諸君に一言申してペンを置きたいと思います。

生徒一人一人が役員になったつもりで、自分が南高生徒会を動かしているという気持を忘れないで、若い南高生徒会をスクスク成長させて下さい。そして、新設校であるが故に多くの苦しみが伴なう半面、創造の喜びを味わうことの出来る特権があると思います。そしてこの喜びとともに我校独自のユニークな生徒会に育てあげて下さい。心から祈っております。（アーメン）

Ⅳ、クラスだより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（13）

Ｐ13・一年一組、The BarbarouS CountrY　一年一組

皆さんにお目にかけた〝三年生激励会〟での僕らの活躍、どうでした、出来ばえは。あの喜劇を地でゆけば、則ち一年一組になるのです。地でゆくと一口に言いましたが、それは大変な苦労だったんですよ。脚本・演出・効果から果ては音楽まで、全て自分達でやりました。実力試験を中にはさみ、まさに泣きたい気持、厳しい演出家について血の出るような練習。しかし、不平を言う者が一人もいなかったのは、僕らの団結力の強さの表われでしょう。団結力といえば、あの時を思い出します。マラソン大会！一月二十五日、五十三人の健児の破壊力のすごかったこと。黄色い声の声援がない、はかない環境にもかかわらず、歯をくいしばって走り通した、あのファイト。惜しくも優勝はのがしましたが、五十番内に五人も入る健闘ぶり。どうですか、これで僕らの一年一組がどんなクラスか、少しは分かってもらえたと思います。まあこういうこと。

では次に、一年一組統計表を発表します。割れたガラス―六、七枚。

同じく花瓶―三個。遅刻０週間の遅刻者―四人。ゴミの数―無数。・・・・・。もうやめた。とにかく、男子生徒数五十三名、女子生徒数０名。計五十三名のクラスであります。

この一年間、面倒を見ていただいたのは、滅びゆく草原（失礼！）の田中先生（通称ハゲカバ）。芥川龍之介の大ファンでいらっしゃる広川先生（通称カッパ）。〝一言文句を言う前にホリャ先生よ〟と学生節を持ちだして、お世話かけました。マッタク。しかし、何を尋ねてもいやな顔一つせず、丁寧に教えてくださった両先生。僕らは感謝の念で一ぱいなんです。もう少し試験問題が易しかったら、先生の顔から後光がさすように見えたでしょうに。

C棟三〇一の教室、そこが僕らのホームグラウンドです。ドアにはガラスでなくベニヤ板がペタリとはってあります。これも、僕らの行動の表われなんですよ。則ち、暴れてガラスを破る、新しいのを入れると又破る、こういうことが重なって、ついにベニヤ板一枚のわびしい状態になってしまったわけです。業間体操は屋上で元気良く、適度？に声を張り上げる。職員室の目という目は全て、僕らに注がれる。それでも一致団結してやっています。見てくださいよ、この涙ぐましい努力を。

一年一組の特徴は、一口に言って〝情熱と団結力〟です。この面では、他のどの組にも負けませんよ。嘘とおもうなら、一度、一年一組を訪問してごらんなさい。(但し、女性の方は禁ず！) 僕らは、進級してもこのままでいたい気持でいっぱいです。クラス紹介の最後に僕らの愛言葉。いや、相言葉を一言・・ガチョン！

P14・一年二組、一年二組というクラス　　一年二組

私達一年二組は一口に言えばまじめであり、かつ消極的である。

援業中にも、意見が出ない時など、よくこの点を注意される。というのは、あてられても黙って立っているだけで、なかなか意見をいわない。自信がないと言わないのだ。先生方もこれには全く閉口しておられるようだ。又、ひどいのになると先生にもよるが、一人あてられて、それで一時間たってしまったこともあった。

授業以外の時にも現われる。会計の方で、お金を集めるときに自分から持って来る人は余りいない。寄付の時などは特にそうだ。これは誰しも持っている感情だが、それが少しひどすぎるのである。又、ホームルームで話し合いをするとき、議長を選出するが、だれも出ない。先生が指適しても、さっと出ようとはしない。それで先生がやったことも少くなかった。そうして、こういうクラスの雰囲気が、いろいろと影響を及ぼした。

例えば、休み時間にいろいろ話してみると、大変面白い人が多いにもかかわらず、授業に活気がないのは、クラスがそういう雰囲気を許さないからだ。そして、生まれつき無口な人が多いようだ。

それで、個人々々がせっかく積極的にでようと思っても、それがバラバラであるため、クラスの雰囲気に照らし合わせて見て、だれもやろうとしない。となると、やはり気が引ける。そして、結局だれもやらないのだ。それでこの前のロングホームルームの時に、担任の安部先生からこのことについて皆に質問があった。

一部の人の意見として、自分より他の人が頭がよさそうで、まちがったりしたら、馬鹿にされはしないかと、それが心配になるというのだった。全く、これには驚いた。そしてこれではいけないと思った。

ふと、その時、クラス会をやったらどうだろうかと思った。このことについては、冬休みに先生の御宅に、御邪魔したとき、ちょっと話に出た。そして、先生の提案もあり、クラス会を行なうことになった。場所は被服室、時は一月二十五日、マラソンが終わってから、ということになって、プログラムも着々とでき、女子の方でも、御茶菓子などの準備をした。

さて、いよいよその日がやってきてプログラムも順調にはかどり、最後のフォークダンスのところに巡って来た。実をいうと、これは女子の提案だったがクラスの親しみを増すために最適だと思って、採り上げた。

ところが、プレーヤーを準備しているうちに、男子の諸君がいなくなってしまった。また、二組の消極さが顔を出したなと思って、一瞬ヒヤッとしたが、しばらくすると、どこからともなく、又帰ってきて、部屋の外の手すりによりかかって、中を見るような見ないような態度をとっていたので、すぐさま部屋の中へ入れて、なかば強制的にダンスをさせた。最初はやはり、手をとるのも恥しがっていたが、十分もたつと、もう男子の方も覚えてしまって、仲よくやっていた。

私は、それを見て嬉しかった。クラス会はどうやら成功したようだ。下手な隠し芸も沢山でたが、一番のねらいだったフォークダンスは、案の定成功した。今は、これでクラス内の雰囲気が変われば、と思っている。なぜなら、御互に親しみを増すことによって、又、理解することによって、相手が自分より偉く見えたりしなくなり、ひいてはクラス全体が積極的になるだろうと信じているからだ。

P15・一年三組、**一　年　三　組　A**

私たちのクラスは、男子二十九名、女子二十五名の計五十四名である。そして担任は数学の先生である。男女クラスのせいか、明るい雰囲気がある。これはちょっと感心しないが、授業中にも笑い声が絶えないことがある。しかし、いつもこうだというわけではない。数学の授業などは、担任の先生ということが頭にあるのか、静かに勉強しようという心があるのか、みんな神妙に聞いている。それで近ごろ、先生からよく注意を受けるのだがあまりききめはないようだ。こういうことは、各自の気持ちしだいであって、二年に進級して入試などが間近に感じられるようになってくると、自然によくなるだろうと思う。

もう一ヵ月足らずで、全員進級の予定である。スクールバスの混雑にも、大きくふくらんだカバンの重さにもなれてしまったが、今年の冬は暖冬異変ということで、雪の坂道を歩いて登校するという洗礼はまだ受けていない。

ある先生の言葉を借りれば、私たちのクラスは「めんぴんおんたれ」だそうだ。この意味は、「めん」は女子・「おん」は男子ということになって、「女子がしっかりしていて男子はさっぱりふるわない」ということだそうである。こんな汚名は返上しなければならないが、あと一ヵ月足らずでは、とうていできそうもない相談である。

生徒会と学級との関係は、うまくいったとはいえないようだ。しかし、生徒役員の方々の努力には頭が下がる思いである。週番の場合も同じで、週番の人が毎週、同じように目標を発表したり、反省をしているが、いくら週番の方が一生懸命になっても、それに他の生徒の協力がなければ何にもならない。要するに、一人一人が自覚しなければならないということである。一時、校内での運動靴や体操服などの紛失が問題にされていたが、今では全く、そういうことを聞いたことがないのは、この良い例である。

話は変わるが、よく考えて見ると、学級でそろって楽しんだというようなことは少なかった。しいて言えば、歓迎遠足があげられるだろうが、中学時代の友達がなつかしいのか、そちらの方へ分かれて行っていたようであった。これは、しかたのないこととしても、このように書くと全くまとまりのないクラスのように聞こえるかもしれないがそれにもかかわらず、今までけんかもせずになかよくやってきたというのは、みんなの自覚があったからではないだろうか。こう言うとこんどは良すぎるようだが、まあ普通以上のクラスだったようである。

もうすぐ二年に進級、たとえ、はなればなれになっても、「クラス仲間はいつまでも」と、ありたいものだ。

P16・一年四組、**僕　の　学　級　　一年四組**

高校に入るとき、まずやはり、自分が入るクラスのことが気になるのは当然であろう。僕も気になった。いろいろと想像してはひとりでわらうこともあった。

そうして、四月の入学式もすんではじめて自分のクラスに入ったとき、仲間になろうとしている人の顔をみた。先生も紹介された。吉野先生だ。

仲間の印象なんて全然なかった。先生については、「なんてやわらかい人なのだ」と感じたように思っている。今も、それはかわっていない。

翌日から楽しい仲間同志のつきあいがはじまり、今日に至っている。四月のえんそく。この時は親しい中学の時の仲間ばかりがあつまっていた。あれでは学級のみんなの気持は近づかない。もっと学級の人どうしで固まったら、はやく友達となれ、学級が楽しくなっていただろう。

六月には、バレーの試合があった。この時男子は圧倒的に優勝し、女子は三位であった。男子の勢いはものすごく、決勝戦でも失点は少なかったと思う。二週間ぐらい前から夕方ごろまで練習した。欲をいうなら練習のとき、みんなでてきてほしかった。したくないといっていた人もいたのは残念だった。次のソフトボールの大会が中止されたのは残念である。

十一月には運動会。十月のおわりはいつもくらくなるまで、準備で大忙し。やぐらをつくったり、仮装行列の準備をしたり、応援のときのものをつくったり。このときは、男子と女子の協力がすごく行われた。これ以来、男子と女子がよくしゃべり、協力するようになった。宿題とか、……。運動会の当日は、絶好の日和、仮装行列はわりときれいにできていた。

競技の方も苦労したかいがあって、総合二位に入る。三年生をやっつけられなかったのが残念だ。今僕達のクラスには賞状が二枚、楯とカップが輝いている。これは一年の他のどのクラスもとっていないものであり、自慢してもいいと思っている。

僕自身としては、はじめのうちは、つきあいづらかった。だってしらない人ばかりだったし。学校にいきたくないと思ったこともあった。しかし、段々、かさねていくうちに、心もうちとけて、すごくたのしい雰囲気がでるようになった。この楽しい雰囲気の中で、勉強することは、楽しいことであった。学校に行くことが楽しくて、仕方がなかった。うれしかった。一時、学級の雰囲気が乱れたこともあった。このときは、本当に学級がいやになった。しかし、すぐにもとにもどった。

この学級の中で、いろいろと感じた。学級のように全体としてつきあわなければならないところでは、めをつぶってやることも必要である。僕達のクラスもそうだと思う。これはまちがっているかもしれない。が僕はそう感じた。まだあるが、もうやめとこう。

もうすぐ二年にあがる。進級すると、学級がべつべつになるがこんなクラスに入りたいと思う。今度のロードレースで、ぜがひでも入賞してほしい。

P17・一年五組、私のクラス・名物男と大和なでしこ　一年五組

僕等のクラスは、最近にはまれな、男子が隔を利かしているクラスである。女子は美人ぞろいとはいえないがおしとやかなのは、おそらく校内一ではないだろうか。僕等、男性にとって、はりあいがないといえばないが、女親分、女社長といって、女性が威張っている世の中には、ちょいと風がわりでいいものである。「男性諸君よ、お嫁さんをもらうなら、一年五組出身の女子に決めたまえ！」。女性陣のコマーシャルはこのくらいにして、我等の天下とばかりのさばっている男性陣の中に、又、一きわ目立った威せいのいい連中を御紹介しよう。

まず三学期間を通じて学級委員長をつとめて来た村里君だ。背が高くて、まあ僕よりは落ちるがハンサムでそれに頭がいいときている。こんなに完全な人間でもあまり女にモテないんだから、世の中というものは面白い。この村里君が、清水一家でいうと、〝大政〟的な存在である。次に五組の小政とでもいうべきか、本当に小回りのきくハッスルボーイ今井正がいる。人呼んで〝長嶋〟、どこでどうまちがってこんないい名がついたのか僕にはわからない。彼は本物の長嶋より、マンガの〝ナガシマ君〟に似てる。これがまたどこで覚えたのか、勉強以外のことは何でもできる男だ。ちょっとのヒマを見つけ出しては、お宮日のバナナのタタキ売りの真似をしたり、映画の主役になりきって、大立ち回りをやらかす。こんなことばかりいっているがバカと思わないで下さい。彼は

人情が厚く僕とは大の仲良しで一つのやきいもも二つに分け合って食べる仲です。もし大学を落ちたら、二人でコンビを組んで漫才でもやらかそうと将来を誓い合っております。

次にひかえおりますのが。五組一のプレイボーイ・出口君、その人である。現代の女性の目はどこについているんだろうか。モテテモテテしかたのないといった彼である。こういうと彼がいかにも浮気者のように感じるかも知れないが当の本人は真面目な情熱家である。彼にはちゃんとしたガールフレンドがいるのに、自分がその座につこうと、彼についていく女性の方が悪い。ここんとこを見ると彼は、追分けの三五郎といったところだ。

P18・一年六組、**僕　達　の　学　級　　一年六組**

僕らの一年六組は男子学級である。皆、俺のような美男子が何故に、男女学級に入らなかったのだろうと、不運を嘆いている野郎共ばかり。しかし、男子学級とは言っても、紳士的な連中が揃っていて、非常におとなしい学級になってしまった。それが時として、運動や勉学の面で、ファイトのなさとして現われる時がある。マラソン大会で、A班・B班ともにビリッケツに呼ばれた時は、さすがに皆苦笑した。

僕らのクラスの担任は女性の間で悪名高い？山田先生。先生の腕の良さは、皆認めるところである。別名ノシイカと呼び、皆の好きな先生である。

僕らの学級の名物として、掃除罰当番制があげられる。上ばきのかかとを踏んでいる者、遅刻者、テストの成績の悪い者など、片っぱしからあげられて、掃除をさせられる。なかなかいい仕組である。

実力テスト真最中、弁当保温箱から、異様な臭いが流れてきた。少しばかり、煙さえ出ている。試験監督の大平先生、びっくりして開いてみると……。コンロの上に、イワシがのせてあり、くすぶっているのだ。茶目っ気のある奴もいるものだ。

高校に入って、はや一年が過ぎ去ろうとしている。面白い学級だった。

P19・一年七組、**わがクラス一年七組を語る　　一年七組**

一年七組とはどのようなクラスかということについて、今から書こうと思う。

それにはまず、わが一年七組は紳士と淑女によって構成されているということをあげねばならない。なぜならば皆、非常に上品でおとなしく（但し、これは授業中のこと）お弁当と試験のとき以外は、たいへん親切だからだ。人数の多いせいか少しばかり、男性の勢力が強いようだ。ぐっとたくましい女性がいてくれれば、も少し女性の地位は向上すると思うのだが……。

次に、皆の目が一番情熱的になるのは四時間目の終わりのベルがなったときである。そしてこのときほど皆の心が一致することはない。皆の目は先生をはなれ、弁当保温器の方にむけられる。弁当保温器も又、それにこたえるように（香わしいかおりとは程遠いけれど）お腹の虫をなかせるような臭いを発散させている。一日で一番楽しいひとときがはじまる。

授業の途中でふと前を見ると、黒板の横のモダンな花びんが目にはいる。ゴミをかぶって少し白くなっている。いつ見ても花ははいっていない。花びんだけでも美しいけれど、やはり花が欲しいなと思う。又、その上には目を休めるために美しい嵐山の写真がはってある。こんな美しい写真を毎日ながめているから七組の人達は……（あとは読む方の御想像におまかせします）

一年間共に生活してきたけれど、特に楽しかったということもなかったし、楽しくないということもなかった。しかし総合的にみると平々凡々とした中に楽しい雰囲気をもっていて案外とよいクラスだった。

P19・一年八組、**一　年　八　組**

一九六四年、四月、終戦っ子といわれ、史上最大の入試じごくを突破した雄者達で、彼ら一年八組が、この希望が丘に誕生した。背は低く小型だが、ファイトの塊で、教育熱心、我らの相談相手にもなってくれる波多江先生が担任でした。

現在、我がクラスは五十二名。一人は転校、一人は身体上の都合で失なったが、皆、りっぱな南高の紳士淑女諸君である。寺の坊さんのむすこ、すし屋の坊ちゃん、先生の子供、映画の好きな者、生物の解剖にこっている者、切手を集めている者、「しょっちゅう我は見られている」主義で女性を気にしている者、崎戸から来た者、島原から、伊王島から、いろんな趣味の、いろんな性格の、いろんな人種の集まった植民地である。男女の仲も至極円満である。授業中でさえも助け合う。ある日の英語の時間などでは、ある人があてられ、困っている。すると、そばの者が小声で教える。先生は「はい、そうですね」とおっしゃる。当人は何も答えなかったのだ。体育祭の時も、女子は放課後おそくまで、やぐらの装飾ののぼりなどいろんな小道具を作れば、男子はやぐら作りに一生懸命だった。当日も、男子の学校に近いもので、朝、まだうす暗い六時半ごろから出かけてきて、準備をしたものだ。どうでした。あの空きカン、太鼓などの鳴り物入りのにぎやかな応援は。ハッスルした紋付き・はかまの応援団長は、右に左に大奮闘。

それに合わせ、皆、クラスの勝利のために、手をうち、声をからし、それこそ夢中だった。優勝はできなかったが、この時、みんな協力の尊さを知り、クラスが一丸となって一つのことにあたることができた。さて、我ら八組の諸君は、放課後、合戦場でソフトもし、昼休みは屋上でバレーボール、体育館でバスケットとスポーツ面もなかなかさかんである。

休み時間ともなると、教室の中で笑い声がひびき、チョークが飛び回ることさえもあった。勉強の面になるとちょっと弱い。彼の、愛する担任のかけ声もむなしく、先徒は〃笛吹けど踊らず〃もっぱら遊びに夢中で、低迷しつつあまり、はかばかしくなかった。

しかしもくもくとあのうだるような夏の暑さの中で風も入らない、ちょうど盆地の底のようなB棟の一階で、冬になるとA棟三階端で、景色どころか、凍えるような寒さに身体をふるわせながら勉学に勤しんできた。そしてついに成果が現われた。我らも片があいた。

このように、僕らのクラスにはこれといった目立った存在はいない。しかし楽しいクラスだ。これからが本当の、担任にも報いる、我ら八組の時代だ。この心意気で南高も我らの手で!!

P20・一年九組、男子五十五人の大世帯である　一年九組

昔から〃男やもめにうじがわく〃と言われているがまったくそのとおりである。男児たる者、小さいことにはくよくよしない。その典型的な野郎ばかりが集まった所である。教室に紙くずが落ちていてもだれもひろわない。だれも小さいことには、くよくよしない。少々荒れていても勉強さえできればそれでよいのである。教室には、野郎どもの集りには珍しくも、花びんがそなえてあるのである。なんと好ましい状態ではないか。但し、花びんはあっても、もちろん花はない。殺伐なふんい気になったところで、我々一年九組の真価を披露しよう。

それはなんといっても明るく、快活であることである。「現代に生きる」唯一の武器である。どんな時でも笑いがある。心からの笑いがある。時々はとんでもない時に笑いが飛び出すが・・・・。

人間笑いを忘れては、死んでいるのと同じである。笑いは、三度のめしと同じである。三度が四度になろうと笑いを忘れてはならないのである。そこにある笑いは他の笑いとは違う笑いである。表も裏もない純粋な笑いである。笑ってばかりいては、しょうがないので次に進もう・・・・。

次に進もうと思ったのではあるが、長所はなにもないのを忘れていた。笑いのほかはなにもないのである。

短所と言えば、よく我々の学級はまとまりを欠いていると言われるがそれにはこういう理由がある。すなわち、まとまると言うのは、ある物を中心として一つになるのである。「ある物」とは凡人であってはならないのである。他の物と同じ物であったならば、何物もそれを中心にはしない。各々がばらばらになってしまう。よくまとまっているというということは、一人の親分がいて、それに子分が集まるのである。我々にま

とまりが欠けているというのは、一つの中心がないのである。いや、あるのかもしれない。しかし、それが混乱としているのである。ある時はよくまとまっていても、もう次の時には、もう、まとまっていない。そういうものであって、決っして、各々が親分になって、他を支配しようとは、していないのである。そういう意味で、まとまりが欠けているのではない。

我々の交わりは、「君子の交わりは、淡くして水の如し」である。遅刻は、校内一。これでもわかるように、男女学級にない「自由なふんい気」それが我々のクラスのトレード・マークでもある。

しかし、なんと言っても、「一年九組」は住みよい。〃笑う（渡る）世間に鬼はない〃とも言うではないか。「校内で一番住みよいクラス・一年九組」の素性はこのようなものである。南高生諸君もどんな時にもSMILEを忘れないこと。（わかってるね！）

P21・22・一年十組、一　年　十　組

戸を開けたとたん、異様なにおい、ドタンバタン、それにある種の騒音が聞こえる。それが私達のクラス一年十組の休み時間の風景である。どこのクラスも、そうであろうが、特に私達のクラスは良く言って無邪気、悪く言うと野蛮である。さっき言った異様な臭とは早飯をする人の特大の弁当から発散するものだ。勿論、おしとやかな女子はそんなことはしない。グーグーと鳴く虫をおさえて次の授業の予習に余念がない。男子の五六人は相変わらず騒いでいる。次の授業にはよほど自信があるらしい。

そして授業の時はとても活発である。理屈をこねたがる年頃からかもしれないが何でも根ほり葉ほり知りたがる人達、要するに真理を探究する人が多いようだ。英語の時間には、その解釈だけでなく心理状態まで考える人が居るのには驚いてしまう。最後には先生まで分けが分らなくなってしまわれたようなことまである。又何か一寸おかしい事があると皆んなよく笑う。笑わなきや損だといった具合なので授業が一瞬中断、人間の〃笑う〃という特権を遺憾なく発揮しているようである。こんな風だから各先生方から頂だいするお小言は、いつも決まって「ノット、スピーキング」だ。それにある先生は「落語か漫才をやっているよう」だとか、何しろお叱りを受けることでも、最高のクラスではないかと思う。

しかし私はここにある好ましい一面が隠されているように思える。それは変にコチコチにならず自由に自分の個性とか意志を発揮するところだ。高校生ともなると、次第次第に消極的になってゆくそうだが、中々どうして〃十組は非常に積極的〃である。そしてクラス全体が男子も女子もよくまとまっている。それが物事のスムーズに運ぶ理由だ。

担任の本池先生はみんなからもよく親しまれている。一寸怒っているように見える時もあるが、やはりほほえみを失われない。そして皆んなをやさしく見守ってくださり、よき協力者である。しかし、先生も人の子、いつぞやの生物の授業の時皆んなが「かぼちゃ」というのを笑ったので、てっきり自分のあだ名だと思っていらっしゃる。先生、あれではありませんよ！

こんなにぎやかなクラスだか二学期に二人の人が遠くへ転校して行った。それでも総人口は五十二人ですしづめではあるが、寂しかった。最初に転校したのは女子の人だったが川崎に行くのだった。駅にはほとんどの人が駆けつけ、まさに何かの映画のシーンでも見ているようだった。そして皆んなが書いたサイン帳、ここにも一人一人の思いやり、そして協力を惜しまない気持がよく読みとれて私まで大変うれしくなった。もう一つの特長をあげると私達女子は体育の力がいいということだ。おとなしいようだが、とても活発でバレー大会、体育祭の総合優勝と各賞を一人じめにしている。ある男生徒いわく「先が思いやられる」と。

私達のクラスには欠点が少なくはないが、そこには皆んなの各心意気でカバーされる。昔の人が言うように「何とかな子ほど可愛いい」と本池先生も思っていらっしゃるに違いない。

P23・一年十一組、**われらのクラス十一組、　一年十一組**

一の十一はC棟一階の最端地にある。近くにはゴミ焼場があり、その上、水洗で流された汚物が教室のすぐ後の下の方にためられていて、常にかぐわしい香りにつつまれている。A棟から移った当時はこの教室に嫌悪を感じていたみんなも、鼻がなれ臭細胞が感じなくなったせいか近ごろはそういう不平もきかれない。担任の先生は、いかにもたくましそうな吉成先生で、掃除大臣である。（掃除の係であるため）ぼくらのクラスは隣や近くのクラスのものからも、他の先生たちからもよく、「クラスまとまってよく、何かやるなあ」「男女仲がよい」などと言われている。実際それはほこりに思っている。遠足、クラス会、体育祭後にも集まってクラスの親ぼくを計った。他のクラスではめったにそんな事はしなく、男子クラスではそんな事など頭にも置いてないそうだ。こんなプランを立てても必ず人が集まるところに、ぼくらのクラスのいいところがあるのだと思う。それに先生もそんな事に非常に協力的で、若いぼくらを理解して下さる。が他の人々が考えているほど、ぼくらがそれに満足しているかというとそうではなく、よくクラス内で、もっとクラスの和を計ろう、ということが議論されている。ぼくらのクラスは、成績はたいしてふるわないけど、体育の面ではりっぱなものである。

まず第一に、僕等のクラスの女子は「強健」なのだ。クラス全員喜びにみちた、が、男子はうれしい反面、何か女子に対してへりくだった・頭があがらないような気風が感じられた。（ぼく自身の気持からかもしれない）ところが一月に催された校内マラソン大会で男子が優勝した。意外であった。他のクラスの人もぼくたち自身も、先生もまさかこうなるとは思ってはいなかった。特に速い人もいないがあまりに遅い人もない。とにかくうれしくて、十一組バンザイと叫びたくなるようだ。その時の優勝旗は今もなお、教室内に燦然と輝いていて、近く記念写真をとる予定だ。

そしてもう一つの特色。教室の前に『松下村塾聯』をまねしたわけではないけど、聯のつもりで『恕』と書かれた聯？がかけられてる。恕を漢和辞典で調べると、思いやりの心、なさけ、あわれみ・・・などあるがこれをモットーにして毎日を過ごしているわけである。今日も又さまざまな人たちが学校生活を送っていく。毎日ラグビーの猛練習に精出している人、コーラス部に入り歌い続けている人、柔道部の新キャプテンとして責任重大な⋈君、近ごろ強くなってきたバスケット部で活やくしている人、又、バレー部の大半を占める選手たち、毎日ただもくもくと学習に精出している人、まったくさまざまな人たちが、あと残り少い（歌の文句ではない）日数を、一年を終えようとしている。月日のたつのは早いものだ。つい先日入学式をむかえたばかりのように短い。これから先を、有意義に、学習・運動に毎日を過ごし、クラス内が力強く結ばれていくようにみんな力を合わせて進もう。

P24・二年一組、**二　年　一　組**

我が二年一組は、雑音とユーモアにあふれ、またちょっぴり勉強やろうかなという雰囲気がただよいはじめた気がする。最初のころは、男子クラスという言葉の中に、何か殺伐としたものを感じ、大いにがっかりしたものだが、いざ一緒に過ごして見ると、予想外であった。授業中は先生がいるのかいないのかそんなことは、いっこうかまいなしに、黒板とはあらぬ方向をみつめ、何かもの思いにしずんでいるようであるが時々「ニヤリ」と笑っている顔や頭をびくともせず、眠りに酔っているものや、新しいアンゼンで、色エンピツのがわを、一つ一つきような手ではいでいるのや、時おり思いだしたように、せわしく机のかどでエンピツをけずりプウーッと吹き飛ばしているものがいる。

また後の方で何かボソボソブツブツ、前では先生が黒板あいてに授業をしている。しかし授業の終りが近づくにつれ、ごそごそと目をさましたり、ふで箱をなおしはじめたりしている。そして終りのチャイムがなりはじめるやいなや、先生にはいっこうにかまいなく教科書をなおし、これから一つあばれてやろうかという意気にあふれた顔が、あっという

まによみがえってくる。休み時間となると、限られた十分間をフルに活用するため、せわしく口をうごかし、動きまわりしている。

中には、これに無関係のごとく、机からはなれもしないで、ただ一人で勉強するものや、まちかねたように、重箱弁当をくいはじめるものや、かよいなれた便所へかけこむもの——これを称して三べんという。——がいるが、多くは五六人づつかたまって、ガラガラ声でスポーツ新聞の裏面を観賞批評して回りの好評を博していたり、一見してどちらもよくもまあこんなに短かいのにと思はれるのだが、足の長さをくらべあい意気揚々としてるのや、オンチにもめげず、妙に可隣な歌を歌ったり、その他いろいろメチャクチャやかましい。それで授業がはじまり先生が入ってくると、おやもうはじまったのかと思うほどであった。運動となると、心のいれこみようは、授業のそれとくらべると一八〇度回転である。特にバスケットとなると、朝、昼、放課後と選手顔まけの熱心さであったが、もう三学期となると、進学のことが気にかかりはじめたらしく、雑音も減少し、豆単をひらいて見るのも出てきはじめた。これはほんの気づいたところの一部分にすぎないが。

女子のいなかったせいか、この一年間男子一人一人がなに一つ気にかけるところなく、個性を十分はっきし、真に一人一人がどういうものであるかわかり、またその特色のゆえに、一学級がまるで、一社会であるかのように感じられ、雑音の中にも、自由な、気ままな、ちょっとおどけた学級ができたのであろう。

P25・二年二組、**こちら二年二組　　二年二組**

「おはよう」。威勢よく教室のドアを開けようとすると握りがびくとも動かない。いやはや、このドアは一学期の最初からヘソをまげたきりスムーズにあいたり、しまったりしたためしがなかった。だから、まず第一の名物をあげると「ヘソ曲りドア」が指摘されるわけである。

さて教室の中をのぞくことにしよう。フーム…掃除は行きとどいていない。教卓の上は白くなっている。たなの上は整頓されていないな。おやおや、どうも目つきが週番のようになってしまった。これでは、この一年お世話になった二組に申し訳ない。ここいらで自慢話の一つでもさせて頂きましょう。

ごらんなさい。この可憐な花を。いつも花が絶えたことがないのですよ。そうは言っても、花には本当に気の毒なことですが血気にはやって走りまわる男子諸君が、日にいく度も花瓶をたおして行くのです。いたづらっ子らしい笑顔で走っているのですから憎めません。そして、のびのびとした雰囲気が一つにとけて流れています。

みんないい人です。男子も女子も、カラッとした明かるさがあります。(いつも遅刻するO君。おっちょこちょいのN君。臨時飯常習のT君。よく笑うNさん。よく鼻をかむIさん。よく髪に手をあてるEさん。)一人一人あげていこうかとも思いましたが、原稿のつごうで以上にしておきます。

担任の宮本先生は、熱心な英語の先生です。皆のことを、いろいろ心配してくれて、帰りのホーム・ルームの時はいつも、「コホン、コホン、いいのか、よく勉強するんだぞ。」と言われるのが、口ぐせです。「いいのか。」の効き目は、余り無いようですけれど、「いいのか。」を聞くと二組にいるんだという気持を、ジンと感じます。そして「いいのか」の上に「コホン」の数が重なると、コトがそれだけ押しせまっているのです。特に試験日が近づいても私達がのほほんとしている時など—気さくでちょっぴりあわてん坊で、「君達、ホラ、英語とは、こうもやさしいものなんだよ、エエ。」と悟り切っていう。「イイノカ、ガンバレ！」これは二組一同の声。

何といっても一年間、慣れ親しんだ自分のクラスは良いものです。陽気な女子。茶目気で気かん坊の男子。皆一人一人が、このクラスを形成しているのです。冷たい反目もなく、宿題は助け合い、「いいのか」の下で首をすくめ、共に笑い、共にしかられ。

ああ、学生生活とは云々。(感嘆詞省略)

とにかく皆さん二組は元気にやっています。それじゃ、私の目からこのクラスを見た報告はこれで終りとします。もっと、このクラスを知りたい方がいらっしゃいましたら、どうぞ、遠慮なく。四十七名が、にこやかにお迎えするでしょう。(これは失言とします。調子の良いことを書いていて、後で立つ瀬が無くなるとこまりますから。)ここいらでペンを置きましょう。――友はよいものだ。信じることのできを友は――

P26・二年三組、**二年三組クラス紹介　　二年三組**

我クラス二年三組は、一口にいって、おとなしい。授業中は、特にシーン。質問もたまにしか出ない。みんな熱心に、開いていることだろうと思う。でも、何となくもの足りない。何かが物足りないのだ。やはりそれは、活発性に欠けているからだと思う。先生をやりこめるぐらいの質問の波を、浴びせかけるようになれば、この物足りなさを解決できると思う。一学期、二学期と静止した雰囲気の中で、勉強してきたが、最近は、少し活発になってきたようだ。

二年の始めは、クラス分けに不満を抱いていた人が、非常に多かったので、クラスも全然といっていいほどばらばらだった。又、最初の方は、男子が女子に押されぎみで、男子と女子との交わりは、ほとんどなかった。クラス会を、二回行い、少しでも男女が、話し会うようにと思ってしたので、少しづつ効果があったようだ。最近、クラス分けの不満もうすらぎ、暖かい雰囲気がみなぎってきた。でも何だか、まとまっているようで、まとまりのないクラスのように見える部分がある。自分の事しか真剣に考えないでクラス全体をよくしようとする気持ちに欠けているように思える。このことはどこのクラスにもある欠陥ではないだろうか。私は、そういう気持を持っている人は、一人も私のクラスにいないと信じたいところですが……。

私のクラスのとてもすばらしい長所は、思いやりのあることだと思う。最近、二人が一ケ月以上、病気で休校した時、クラス全員、悲しみ、又、励ましの言葉を投げかけました。これからも、こういう思いやりが飛びちることと思います。

現在、「心の小径」を、みんなで毎日順番につけています。一つの題を決めて、紙面上で学級全部の人と話しあうのです。これにより、みんなの考えを知り、その人の性格を知り、自分の考えをぶちまけ、お互いに紙面上で接するわけです。これは、クラス団結に、少なからぬ効果をあげていると思う。

最近の私のクラスは、前よりも、明るく愉快になったが、まだまだ十分なクラスとは言えません。男女クラスのよさを、残り少い三学期中に発揮できることと思います。

P27・二年四組、**二　年　四　組**

クラスについてとやかく云う前に、私達の学級日誌を読んで下さい。以前の日誌は単なる記録にすぎなかったけど、近頃は充実したものになっています。各々がしっかりした考えをもっています。学級づくりを真剣に考えていることがわかるでしょう。クラスがまとまっているとは云えないかも知れませんが、まとまろうとしている努力は認めて下さい。いざとなったら、一つに固まる自信があります。

主任も副主任も、社会科の先生であることも特徴の一つでしょう。家庭に帰れば、よき父親でもあり、一妻のよき夫でもあります。(保証つき)

主任の藤原先生ほ、勉強のことについては大変熱心です。実のところ、わずらわしく感じることもありますが、何といっても、私達の為を思えばこそですから。面長の顔に、小さいわりに鋭い目がくっついています。時々、無邪気さを感じさせるようなかわいい目に出会う時、誰でも親しみを覚えるでしょう。

副主任の前田先生は、一男あるとはいってもまだまだ若いので、私達のよき話し相手です。授業を受けている人は気付いているように、実に大きい目玉をしています。あの目玉だったら、教室に並んでいる一つ一つの表情が一目でわかるでしょう。しかし、目の大小にかかわらず、眠たくなる時があるのはどうしようもありません。

私達はこの四つの目玉に見守られて、どうにかここまで育ってきました。クラスを一つの家庭にたとえるとしたら、藤原先生はちょっぴりこわい父で、前田先生は優しい母ってところです。そして私達は、……イタズラ好きのかわいい子にでもしておきましょうか。そろそろ独り立ちしたい年頃です。人生についても恋愛についても、真面目に考えるようになりました。これからも、二人の先生を相談相手として、太陽の下で健康な青春をおくろうと思います。

P27・28・二年五組、二　年　五　組

「二年五組、それはどんなクラスですか？」と、聞かれたら僕はちゅうちょなく「いと美しき男女の集りでいとめでたきクラスだ」と答えるに違いない。いやきっとそう答える。一年の時は男子クラスにいたせいか女の子と話す機会が少なく、共学クラスになって女の子と対等に話すことが出来るのだろうか、又こんなことをいったら女の子にたたかれるのではないかと、そんなことを考えると夜もろくろく眠れず、一時は女性恐怖症にかかった。それが一週間もすると純情でやさしく美しい人達ばかりでそんな心配は全く杞憂に過ぎないということがわかった。

新任の浦川先生を中心に何もかも新しいづくめの五組は最近池田君が盛んに言っている〝人づくり〟ならぬ〝クラス作り〟にみんな一丸となり、がっちり組んだ人の四十七手は忠臣蔵の四十七士の団結のように、どんなものにも決してほどけないように固く結ばれていた。ある時はハイキングに行ったり、クリスマス会をしたり適当にレクレーションもやった。しかしかといって遊んでばかりいたのではない。部屋の中はいつも勉強しやすいように、美しい花が飾ってあったが、汚れていたり、教壇や机はゆがんでいたり……。でもそれがかえって美しい花とよくマッチして不調和の美さえ作っていた。またその花もはじめはいい匂いを教室中に漂よわせていたが日が経つにつれて枯れていき誰もそれをかえようとはしない。これは兼好法師のすべてのものは完全でない方がいいという教えを忠実に守っているのだろう。一学期のはじめはテストの平均点が下位だったが、みんながそれ以来ヤル気を起こしたせいかぐんぐんとうなぎ上りに成績が向上し、今では見違えるようよくなった。此れは一人一人の努力の結果だということはいうまもないが、日曜や土曜をさき普通の日も遅くまで残ってガリバンをきったり、その他クラスの為に、かゆいところに手の届くような献身的な奉仕をしてくれた委員長、及び副委員長の働きがあったこともクラス向上の原因の一つであるといってもいいだろう。又五組ほど落書きをするクラスはないだろう。

とにかく暇さえあれば黒板いっぱいに日頃不満に思っていることを書きなぐったり、先生のアダ名や似顔絵を書いたり。そんな落書きがあるので先生の中にもそれを見るのが楽しいのか、ベルが鳴る前から教室に入って来られる先生もおられた。ある心なき人は〝五組は養子組だ〟というそうであるが、そんな人は本当の五組を知らない人で、すなくとも五組に対してジェラシー的感情をもっている人であると思う。そんな考えをもっている人は一度この五組に来てみるといい、どんな人でも必ず好きになるから。一般に遊ぶにしても勉強するにしてもこれが本当の高校生活だという実感が湧くのは高二の時といわれている。この良き時代を五組で送ったということは、長い人生における喜びの一つとしてみんなの心のかたすみにいつまでも残ることだろう。

＞仲間たち＜

一、いつも遅刻をしたあいつ　　二、授業サボっていたあいつ
宿題写していたあいつ　　毎日早飯したあいつ
思い出すのは五組のことよ　　思い出すのは五組のことよ
みんな一緒にしかられて　　みんな一緒にはなれずに
廊下に立った仲間たち　　行こうといった仲間たち

P29・二年六組、二　年　六　組

二年六組。男子二十五名、女子二十一名の。愉快な、そして、ちょっぴり、オセンチな、クラス・である。担任は、南高一、背広のよく似合

うスマートな、広瀬方人先生である。二年六組が、他のクラスとちょっと変わっているなと思われる点は、班活動を行っているところだろう。一班５・６名の班が、八つある。班活動の主なものは、ノートの交換であるが、色々な、助け合いが、この班を通しておこなわれた。その点に於いて、大変、有意義だったと思う。作成の前、班の人達だけが、殻に、閉じこもるんではないか、などと、心配もあったようだが、私には、かえって、クラスがまとまったように思える。

二年六組から、五名の人が、色んな、事情で入院したが、班の人が、中心になって、お見舞いに行き、ノートの整理をやったりした。そのためか、男女の間の壁も、上質のチリ紙位にうすくなった。皆、気の良い、やさしい仲間である。授業中は、必ずしも活発だとは、いえない。でも一人、一人が、やらなければ、という自覚をもっていることを信じている。

さて、外形、つまり容姿はというと、これ美男美女ぞろい（？）心は、さっきも、いったとおりである。花嫁候補、花むこ候補は、全て、二年六組からと、お勧めする。

欠点は、やはり、もう少し活発であったほうが良いということ。授業中、あまりにも、おとなしすぎるから。

マラソン大会では堂々優勝。女子の中にも一位入賞という意気のあるところをしめした。皆が可能性を信じて、努力すれば、各人、もっとすばらしい人となるだろう。もっとすばらしいクラスができるだろう。そう信じて、ペンを置く。

P29・二年七組、**二　年　七　組**

私達のクラスは男子二十六人、女子二十一人で他のクラスと別に変ったところはありませんがおとなしいということが違っているといえましょう。でもそれは授業中だけであって休み時間になると、あちらこちらで群をなしてペチャクチャ。一般に、女子の方がおしゃべりだといわれていますが、そうとは断定し難い現象です。しかし極めて消極的であり、授業中の無気味な静けさがそれを如実に表わしています。また討論する時にも言えることで指名されなければ意見をのべないという人がほとんどです。

議長が「決をとります。今の意見に賛成の人」半数ぐらいが手をあげる。「では反対の人」だれもあげない「他の人はどうなんですか？」「……。」いつもこうで結局先生からの確固たる意見が出て討論は打ち切り。

しかしそういう中にも明るさはありました。一学期に行われたソフトボール大会においても、試合前の選手の練習といい、当日の応援といい、おしくも二位（女子）ではありましたが、団結というものがありありとみられました。体育祭の時も、学校全体が活気的になっている中で、私達のクラスもみんなの協力でりっぱな実を結んだといえます。成績も、女子の方はあまりふるいませんでしたが、男子は上位に入賞し、先日のマラソン大会においても入賞者五十名中二年生十六名・その四分の一すなわち四名が私達のクラスだというからたいした活躍ぶりです。しかしその反面たくさん点を稼いでくれる人がいて総合では四位でした。

一人一人を見た時、善良ではありますが、真に熱心に自分の将来を思いそして素直に現実を直視し、ある厳しさをもって一日一日を送っていた人がはたして何人いたでしょうか。「予習して来た？」「Ｎｏ」こんな内容の問答が何回くり返されたでしょうか。

私達は、時々、一日がつまらないと思い勉強する気にさえなれない時が良くあります。そんな時、教室に一歩踏みこんだとたん、明朗な気分になり「さあ勉強しよう」という意欲か自然とわいて来るようなクラスの雰囲気であって欲しかったと思います。

P30・31・二年八組、**二　年　八　組**

我が二年八組は最初からとてもはりきっていた。しかしその気持をくつがえすかのごとく不幸なあるいは残念な出来事が次々と起った。まず新学年になって一月立つかたたないうちに浅田君が退学してしまった。もちろん事件を起したのではない。一年の時からノイローゼぎみだった

そうで人一倍生徒思いの一瀬先生の説得のかいもなくついに彼は二年八組を去ってしまった。そしてしばらくはクラス全体が成績も非常に良かった彼を引き止める事のできなかった悲しみに陥った。

次に八組の張り切りを一人で背負っていたような甲斐君の転校であった。実際彼のいなくなったクラスはシュンとなってしまった。しかしこのような事でクラスはかえって強くまとまっていった。そしてその現れが夏休みの修学旅行であった。クラス半分ぐらいが参加した。そしてその旅行中和気あいあいとして非常に楽しいものとなった。だがなぜだか八組にかぎって病人が二人も出てしまった。そのため一瀬先生はろくろく眠れなかったでしょう。

そして旅行から帰ってしばらくした時本当に不幸な出来事が起った。佐野君の家の火事である。全くびっくりした。さっそくカンパをした。だが家で勉強できなくなったと言って学校の補習に出て来た彼の顔が思ったより明るかったのでクラス一同一安心をした。そしてこれらのいやなことを清算するように十月の体育祭が来た。この時は皆思い切り騒いで暴れ回った。教室一ぱいもあるような大幕に石川五右衛門を描いて後に張りめぐらし制帽を作って鐘や石油カンで応援のかぎりを尽した。その割に成績は一番にはなれなかったが、皆満足感があった。

ところがその後勉強に運動に八組を背負っていた土井君が腎臓病に倒れてしまった。最初は簡単に考えていたが、しばらくしてもう癒って出席してくるだろうと思っている頃、彼の病気は想像以上に長くなり、二、三カ月もかかるということがわかった。そして、二、三カ月たって三学期も半ば、ついに彼は休学となってしまった。まったく慰める言葉もないくらいだった。そしてせめてもの慰めとして彼に何か贈ることになったが、彼の希望がコケシということだった。この希望でファイトマンの彼の別の一面を見るような気がした。そして八組は最後までついていなかった。それは山本君の入院であった。それは左手の脈がないという奇病だが本人はなんともないようだったから案外早く退院できるかもしれない。

以上が八組の一年間である。こうして見ると次々といやな事ばかりでどんなクラスなのだろうと疑われるかもしれないが、このような事にもめげず着々と住みよい一致団結のできるクラスと出来上っていった。それは全くひとえに若くファイトマンで、クラス全体を暖かく包んで下さった一瀬先生のおかげであった。そしてもう一つ先生のおすすめによる「心の記録」である。最初はめんどうなものだと思っていたが、だんだんその良さがわかってきた。この記録は皆の悩み、思い出、決意、不満、何でも書いてよいのである。そして自分に回って来た時、他の人のを読んで新たなファイトを燃やし、表面には表われない友達の悩みを知り激まし合う。また前に自分が書いた文に対して詳細に書かれた先生の注意、批評を読み、気を取り直す。全くこの記録で八組は全員固く結ばれた。そうして学年末の近くなった最近になって、何かしら離れがたさを強く感じるのである。

だがこのようなすばらしい八組に一つだけ大きな欠陥があった。それは女子が一人もいなかったということである。不思議と花は絶えず教室の真中や、神棚のように黒板の両端に置いてあった。それでも何となく乾燥したクラスになったのは仕方のないことだろう。この点では八組は非常に不幸なクラスであった。

P32・三年一組、私達のクラス　三年一組

進学を目的とする為に、就職よりも進学に重点を置く普通高校。わが校もその例にもれない。試験を目前に控えて、猛勉強している友を見るにつけ、その姿をうらやましいと思うより、そんなにまでしなければ入る事の出来ない大学入試を、つくづく残酷だと思う。そんな中で、私のクラスはなんと明るく、のんびりした雰囲気に溢れている事か！のびのびしていかにも高校生らしいその姿は、見ていて気持がよい。それに女子が多いせいか、教室の中が清潔で美しい花も毎日飾ってある。しかし、次のような問題点もある。バラバラとしてまとまりがなく、力強さが感

じられない。それに、おしゃべりも多い。

授業は主要五科目は、他のクラスと変わらないが、就職クラスらしく、書道と珠算の二つが加えてある。女子の希望で、特別に家庭科が設けられている。女子の中に交じって、なれない手つきで料理している男子を見ると、自然に口元がほころんでくる。又、精神修養の為め、茶道も一時間習っている。実習のないその他の授業の時は、なんとなく活気がない。そして、先生の話には無頓着で、おしゃべりに夢中になっている人もある。又、舟をこいでいる人もある。先生も心得られたもので、しらん顔をしていらっしゃる時が多い。

就職試験は、六月から始まった。試験が始まると、さっと緊張した気分が、教室中にみなぎった。時が立つにつれて、わが世の春という顔をした人と、深刻な顔をして、一生懸命勉強している人に別れてきた。何故、就職試験はそんなに早くからあるのだろうか？何故、みな一緒に決まらないのだろうか？幸か不幸か、私は就職試験のきびしさを味わっていない。筆記試験・身体検査・面接、きっと普通の試験よりもむずかしいに違いない。それなのに何故、普通高校は、進学と同じ位に就職に力を入れないのだろうか？先生方の中には、就職する人をばかにするような事をおっしゃる方がいる。就職する者のどこが進学する人と違うのだろうか？みんな同じ高校生ではないか。私の頭の中を、何故、何故という疑問が、たえずかすめる。しかし私がいくら考えても、叫んでも、解決の出来ない問題である。

さて、クラスの人数は全部で四十四名。その中に六人の侍がいる。背の一番高いA君、理科の得意なB君、いつも静かなC君、チャップリンみたいなD君、低音が魅力のE君、体操の得意なF君。彼等は一人一人違った個性を持っている。しかし、彼らは、六人の侍ということで、少し畏縮してしまって、男らしさを発揮していないのではないだろうか？「クラスの功労者を上げなさい。」と尋ねられれば、私はすぐに、「Gさんです。」と答えるだろう。ガッチリした体をフルに動かして、クラスの為に身を粉にして働いた彼女、彼女がいなかったら、クラスの和は、保たれなかったかもしれない。バレーをさせると、南高一のHさん、落着いた女らしさを持っている茶道部のIさん、歌の上手なJさん、縁の下の力持ちのKさん、バスケットのうまいLさん、一番背の高いMさん、何でも万能のNさん、長くて美しい黒髪を持っているOさん、スマートなPさん、可愛らしいQさん、美人コンビのRさんとSさん、ハスキーのTさん、まだまだたくさんいるが、私にはとても彼女達全部を、紹介する事が出来ない。そんな彼女達の長所や短所の一つ一つが、私の脳裏に、彼女達のイメージを強くやきつける。ほんとにみんないい人達だと思う。前にバラバラしていてまとまりがないと述べたが、いざという時には、一致団結するような協力精神が育って来た。読書もたいへん盛んで、いつも図書館は、私達のクラスで一杯だ。意義ある高校生活を、もうすぐ終らなければならないのは残念だが、卒業してからも、後輩の為に、第一回生としての責任を常に果たすために、私のクラスは努力するだろうと、私は信じて疑わない。

P33・三年二組、迷羊の群　　三年二組

本校では、十二月を期して大学受験の為の特別授業が始まり、自分の受験科目だけを選択して学べば事足りるようになった。従って一学期からのクラス編成が余り意味をなさなくなって独自のクラスカラーというものが、一二年の時よりも生れにくかったと思うのですが……。

私は、三年二組は、「迷羊の群」であったことを信じて疑わない。より良き解決法を求めて様々の問題を共に語り合った子羊たちの群であった。

学生とは、本来、社会のどの部分にも属しているものでは無い。又、属してはならないものであると考えます。世間における地位、生活力において何ら誇るところが無くても、大空を仰ぐような、一点けがれ無き高い希望、明日の漱石、ゲーテを夢みる青雲の志、そういう青春無垢な憧れこそ学生の特権である。この特権を自覚し、この特権を誇り、三年二組は老成の社会人と一画を成して来た。希望の燈火が、時としては絶

しそうになったり、絶望のどん底に落ち入ったりはしたが、それにも拘らず、否、その為にこそますます明日への希望を強くした。三年二組の希望は常に大きく輝やかしいだけに、それに伴う困難も大である。希望が高ければ、迷うのは当然である。迷う人は、迷えぬ人より数段勝っている。それは社会人となった「迷羊の群」が、明々白々としてくれることだろう。

先輩と卓を叩き合いながら、悲憤慷慨することこそできなかったけれど、共に路傍に迷う良き師と、良き友を得て三年間の高校生活を終える私は、幸福である。

P34・三年三組、我が三年三組　　三年三組

三年三組、一口に言えば、理科系進学クラス。

二口に言えば、梅ちゃんクラス。

三口に言えば、三年で一番まとまったクラス。

僕等南の三年はどちらかと言えば他校に見られない、柔和なやさしい落ちついた学生と言える。まあその中でも特におとなしい美男、美女が梅ちゃん(梅田先生)とモヒカン(林田先生)の下に集まった。それが三組です。

特にすばらしい生徒とか特におっかない生徒はいないけど全部が集まると南高随一の強力な力を発揮するから不思議といえば不思議だ。

あれはたしか、去年の十月頃だったと思う。体育祭の為の会議がクラスで開かれたとき、意見は四方八方から出て混乱状態となった、が、しかし、翌日になるとピシッと一つの筋にまとまった。それからあとは皆さん御承知でしょう。あの体育祭の日、三組の仮装行列を優勝にまでもっていったのは誰でもない、全員だ。全員の気持が一つにまとまったからこそ成し就げられたのです。又この優勝は単なる勝利でなく、クラス全員が、お互いを良く理解し、見つめ合った結果とも言えよう。

十一月以降の三組には共に善び、悲しみ悩み合う風景がいたる所に見られた。受験者の不安な気持も、一歩三組に足を踏み入れると、いっぺんに吹き飛んでしまった。そこから詩(うた)が生まれ、受験へのファイトを生み出した。

僕等の南の憩ひ出は
　青いレモンの味がする
とじるまぶたのそのうらに
　希望ケ丘のパイオニア

……

僕等の南の想い出は
　青いレモンの味がする
たつ鳥あとはにごさぬぞ
　我等が南よ栄えあれ
我等が南よ栄えあれ
別れたくない。それが皆の気持だ。
だが、木枯らしが止んだらお別れだ。
深い霧の中でも、高なるブルドーザーの響きの中でも、
暑い夏も、きびしい寒さの冬も、
高体連の日も、体育祭の日も、
共に手をとり合い涙を流しあってきた南高第一回生。
そして、高校最後の三年三組。
気魄と情熱は我等の手の内にあった。
僕の体の中に真赤な血潮の魂が、
　ドクドクとこみあげてくるのを感ずる。
我等が南
我等が旧長崎南高三年三組
永久に栄えあらんことを。

P35・三年四組、私達のクラス　　三年四組

私達のクラスの構成は男子四十四名、女子六名。三ノ一とは対照的な構成である。私達「六人の姫御前?」は初めのうちはどうなることかと心配だった。男子諸君に圧倒されるのではないだろうか、小さくなってしまうのではないだろうかと。しかし思った程でもなく、とても平和な世界だった。今では住めば都で六名の女子は安泰に暮らしている。男子諸君は他のクラスに比べると、まじめで、乱暴なこともしないし、グループでもつくらず皆仲が良い。少しおとなし過ぎると思うこともあるが、

これは今の高校三年生の一般的な傾向のようだ。とにかく私達女子がこの一年間、窮屈さも居心地の悪さも感ぜずに過せたのは四組の男子諸君に負うところが少なくないと思う。

私達のクラスは進学クラスだから大学に関する興味が強いのは当然である。主任の先生が学級のために置いてくださる螢雪時代は二、三日たつと、すみのはうがすりきれてしまう。受験雑誌が教室にそなえてあるということが私達のクラスの特色といえば特色だろう。

この一年間をふりかえってみて残念に思うことは、体育祭などで、クラスとして活躍できなかったということである。一方、なつかしいのは物理の時間である。私達女子は少しでも良い席をとろうと思って急いで行ってみると早くも良い席は男子諸君に占領されていて、しかたなく乙席ぐらいにすわらねばならなかった。又ある時は今日は我ながら良い席がとれたと思って満足していると机の中にはちゃんと道具が入れてあってびっくりすることもあった。

ともかくも教壇の一隅に人の足ぐらいの穴ができたことの他には特に困ったことがなかったのは学級として良い事だと思う。

V、クラブだより

V、クラブだより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(36)
運動部　卓球部女子、バレー部、剣道部、バスケット部、卓球部男子、陸上部、庭球部、山岳部、ラグビー部・・・・・・・・↑(43)
文化部　生物部、演劇部、芸術部、茶道部、文芸部、JRC・↑(50)

《運動部》

P36・卓球部女子、**卓球部女子**

「遅かったね！」「掃除やったとよ！」こんな声を更衣室ではしょっちゅう聞いた。その中で大きな声とか変な声の発声もとをたどると、卓球部という説があるが、心外な事である。それにしても練習の終った後の気持ちは何ともいいものである。いそいそと帰り仕度をしながらお喋りに花を咲かす。気の合った同志だから一日の反省などもよくした。

始めの頃は勝手がよく分らず困った事があった。たとえば、コンクリートの上に台があるので、体育館用の上履きにすぐ穴があいてしまったという事。一学期間で二・三足買い変えた末ようやく体育館用のとは別に新しい厚い物を使う事にした。場所の狭い事にも困った。台は三台しか置けないし、別の台の人とぶつかったり、ちょっと強い球が来て、入らないと下へ落ちてしまう。また、バレーボールが上まで飛んできて遠いはずの窓ガラスを割ったりする。激しい時は命がけ（？）で大きなボールをよけていた。

いよいよ試合の日が近づくと、闘魂たくましく（？）この意気を見よとばかりの練習ぶりが続いた。高体連の時は、キャプテンの松林さん（二年）を始め、三人の一年生という、極めて若い（？）メンバーで、試合に不馴れだったので戦いぬいた末、第一回戦で破れてしまった。が、二学期の新人戦では、かなりいい所まで伸びてきた。県大会に出場したのは松林さんだけで、外の三人もあと一人負かすと出場できるという所まででいった。一学期の頃と比べると少々ではあるがみなそれぞれ上達しているという気がした。

始めの頃、チームワークが足りないと先生からお目玉をくらった事もあった。以後話し合った結果集合もトレーニングも掃除もきちんと時間をきめ、実行するようにした。その他ほんの少しほめられた事もあったし、全部話すと二週間くらいかかりそうにたくさんの失敗談もあった。こうして私達が得たものは、いかに普段の努力が大切かという分かりきった事だった。この一年間に体で感じたその事を無駄にしないよう、これからも頑張っていこうと思う。

P37・バレー部、**バレー部**

バレー部が今日のように安定してくるまでには多くの苦労があった。ふり返ってみると我々が一年の時はまだバレーボールも九人制であったが、それも束の間、六人制バレーボールというあまり一般に知られない方法に変った。

我々は始めからやりなおさなければならず、コートの名称とか規則とかを勉強しながら、全く心細い思いであった。又、其の頃は、二年生と一年生だけであり、三年生も加わっている他校と比べて経験不足や戦力不足、それに各大会で会う一回戦の相手が皆、県下の強豪校という不運で全くつらかった。しかし、其の頃からいわれ始めた「気魄と情熱」という言葉がいつしかバレー部の合言葉となり、苦しい練習の時でも「ファイト！」という叱多と共にくりかえされたのである。そんな努力が報いられないはずはなかった。男子バレー部は昨年の春季選手権大会、高体連、国体予選とたてつづけに三回の大会にいずれもベスト８という記録をたてたのである。

特に高体連においては今も南高生の中で語られるあの島原高戦の時には、バレー部の持つ意気と根性が余す所なく発揮されたのである。第一セットは取られ、第二セットはどうにか逆転でものにしたものの、第三セットも又、六対十三と半ば絶望に近い苦局から十三対十三と立ち直り、ついに十五対十三と又も逆転して勝利を勝ちとったあの粘りは、即ち、バレー部の合言葉である「気魄と情熱」から生まれてきたものであった。

又、おりしも同じ大会において、女子バレー部にも同じ事があった。相手は、奇しくも因念深い島原高、第一セットは南高がとりながらも、第二セットは七対十四と瀬戸際に立たされたが、味方にサーブ権がまわって来た時、鋭いサーブの連続で、十四対十四のジュース、そして十六対十四とストレートで破り、南校女子の意気盛んなところもみせたのである。

このように昨年は我々の精神面が大いに発揮された年であった。しかし、バレーは根性だけでは成り立たない。男女バレー部が共に苦手とするところはネット際のプレーのまずさと、連続動作の不徹である。それと、練習場が狭い事、練習時間の不足はなんとしてもいたく、何度となく他校をうらやんだこともあった。しかし、今にして思えばそれも又、我々の精神面をたたえる一つの試練であったかもしれない。

前には「バレー部はいつ潰れるんだ。」などとひやかされた我々だが、一年生も多くのものがくじけずに残り、毎日、締習にはげみ実力も少しずつ上っている。現在は、二月九日の春季選手権大会を目指して一生けん命、努力している。実力試験の勉強が思うようにできないのはつらいが、今年こそはできうるかぎり上位に進出し、ベスト４の壁を破りたいものである。もちろん、優勝できたら最高なのだが……。

今年はオリンピックの年でもあり、バレーボーもオリンピックの一種目に加えられている。女子バレーボールの日紡貝塚は破竹の進撃をとげ、男子バレーボールの全日本も又、昨年、東京において世界最強のソ連をやぶり、我が日本のバレーボール界は今や世界一となっている。我々も又、なお一層努力して勝利の道をばく進して行きたいと願っている。

P38・剣道部、**剣　道　部**

四月に新入生を迎え、部員数も二十名とふくれ上がった時には大いに心強く思ったものである。しかし、時の流れに従い、それにつれさられたごとく、じわりじわりと減っていき、ついに、九名となったのは全く残念である。

さて彼等と共に、六月の高体連めざしての猛訓練？が始められた。頭が割れるようにメンを打たれ、手がしびれるように小手を打たれ、少しでもなまけると怒声が飛んで来、倒されても倒されてもまいらず、ひたすらに頑張った。

いよいよ当日、相手は大村工業、猶興館である。敵は有段者ばかり、しかし、恐れるには足らぬ、敢然として臨んだ。が、選手層の薄さを克服することができず、ついに大村工業には二―三、猶興館には一―四と破れさった。破れたとはいえ、試合内容はかなり肉薄していた。あと一息である。

さて捲土重来、再びあの練習ははじめられ、夏休みには合宿、他校との練習試合も因を増し、着々と新人戦への準備はつづけられた。時は十一月、先の昇段試験で有段者も増えた我々だ、勝てないはずはない。と

ころがである、試合に勝って勝負に敗けたとでもいおうか、佐世保工業に二―三と破れさった。普段の力を十分に出し得なかったというのは、やはり、実力のなさであろう。もう一度やれば必ず……。

さて、今やもう二年目が終わろうとしている。一年間を振り返ってみるに、最大の悩みは練習場のなさと部員の不足である。それに加えて技術的指導をして下さる方がおられなかったのも残念である。我々の練習にも多分に欠陥があった。来年度は、過去二年間の経験を生かし、高体連、新人戦は勿論、玉龍族大会、全国大会にも進む野心をもって、より良い、より強い剣道部に育てていくつもりである。乞う、御声援　！

P38・バスケット部、**バスケット部**

三年生ありがとう。第一回生を送るにあたって、改めて、感謝の意を表したい。このすばらしき南高バスケット部の伝統第一歩を築き上げてくれた第一回生。一月十九日バスケット部の送別会を開いた。その席上「梅チャン」こと梅田先生より、一回生の歩んだ労苦の道を感慨深げに話された。創立当時はリングもない赤土のコートで。パスとドリブルだけという練習振り。中学生チームと試合しても軽くまかされていたという。リングが設置されて初めてシュートした時の感激。外での練習の際「風を計算に入れてシュートせろ」と冗談ならぬ事実である。

ここで南高バスケット部の成績を振り返ってみよう。初めての高体連出場で、川棚高と対戦、大接戦の末、惜しくも敗退、以後川棚高との対戦はたいへん友好的に行われたが、内心は仇を討とうと闘志がわく。この敗北は一回生にとって忘れ難い敗北であったろう。そして二度目の高体連出場、相手は佐商。自信はあった。一生懸命やった。試合終了のホイッスルが鳴った。スコアは?、勝ってる。確かに勝っている。一回戦を初めて勝ったのである。その時、二回戦は優勝候補の長崎東。ライバル意識も手伝ってファイト満々。負けはしたがその試合内容は一躍注目を引いた。その頃から南高もようやく存在が知れ始めた。今年の島原での高体連。一回戦壱岐、二回戦佐商を破り、三回戦長商に惜敗。その原因は精神的修練がまだ不足で、ねばりがないこと、相手が長身揃いに比し、こちらがあまりに小柄であったことである。

以上主な試合の成績内容を述べたが、最初は連戦連敗であったのが、今では決勝に進出するようになった。夏休みの合宿をはじめ、黙々と練習に励んだ。みんなよくまとまって頑張った。平均身長も一七〇センチを越える位になった。そして十二月、佐世保で新人戦があった。一回戦はまた川棚、今度はギャフンと言わせる予定であったのが、少し手こずった。二回戦佐世保工業、準決勝佐南を破り決勝に進んだ。相手は島高。前半の29―10のリードにもかかわらず、ぐんぐん差が縮まり、ついに負けてしまった。一瞬の出来事だった。

ともかく決勝まで残れるようになった。バスケット部。いいクラブである。クラブのこの雰囲気は三年生が残した代え難い賜物である。送別会の時も、僕等の夢はもう全国大会へと飛んでいたのである。

P39・卓球部男子、　**卓球部男子**

現在我々の卓球部は吉野先生と広川先生を顧問として男女約二十人からなっている。入った当時は三年、二年の先輩も合わせて百人近くもいた部員が今は二十人とはなさけない。これはやはり卓球台の不足による「ちょっとしかされない」という事が最も大きい原因のようだ。しかし残った二十人近くの部員は台の不足にもめげず頑張っている。

男子は一年生の若手ばかりで「今年こそ！」と張り切っている。南高の誇るファイトマンの穎川。卓球部きっての心臓男の朝永。頭よし、ピアノも弾き、ヴァイオリンも引き、卓球なんぞお茶の子さいさいという南。変わった味の持ち主の納富。左手でハッスル米村。徐徐に調子がよくなっている岩田、酒井、万屋、松尾。それに南高にただ一人のシェークマンの僕といったメンバーで。

しかし一年生ばかりだからか、はつらつとした感じはあるが一方しまりがなくだらっとしたところもある。例ば掃除である。協力性がなくみんなでいっしょに掃除することがめったにない。これではせっかくのク

ラブも、ただの個人個人の遊びにすぎなくなる。やはりクラブというものは、そこから何か学ばねばならぬと思う。現在の卓球部はその点、「個人の遊び」の方に近いと思う。この事を今年こそ直し、もっと強力なチームワークの整った卓球部にしたいと思う。

ところで去年の成績はというと、徐々に強くなっている感じである。一年ばかりで試合経験が少ないせいか、本来の力をまだみんな出し切れないでいる。だが今度の高体連こそは充分な力を出して戦おうと思う。

P40・陸上部、**陸　上　部**

曰く、「創業と守成と執れか難きと。」玄齢曰く、「草昧之初め、群雄並び起り、力を角して而る後之を臣とす。創業難しと。」魏徴曰く、「古自り帝王、之を艱難に得て安逸に失はざるはなし。守成難しと。」これは唐大宗が侍臣に問うた会話文である。千数百年を逆上る昔、論じられた古のが、そっくりそのまま我が南高にあてはまるのでなかろうか。

創業すなはち創設校という名のもとにいろいろと苦しまなければならなかった先輩諸兄よ、我々は心から御苦労様と声を大にして叫ぶ。前にあげた会話の中で「群雄並び起り云々」とあるけれども、現在の我々の立場はそれと異り、周囲の学校はもう今までにその歴史なり実績を持っていて、それに対してそれこそ真の白紙の状態から起りそれらの学校と対抗するのだからそれは絶対に創業が難しと思う。

満目蕭然としたと言う形容の如く全く殺風景な所で、冬の北風ときたら全く話しにならないように鋭く肌を刺す。そんな山上の少しばかりの基地を見つけてトレーニングに励んだ彼らの姿を思う時、ひとしお創設の苦しみがしのばれるものである。我々に何の感動とて興させないこのグランドを、体育館を、図書館を、それから我々一、二年の入学するのを雨の停留所でバスを待つ、河童の夏を待つ思いにも等しいような、じれったい、むずむずする気持で待っていた事であろう。そしてその完成した時の気持、喜びは我々には味わえない何者かであったろう。そうした中で行われた高体連、人数も少なかったせいもあってか、雨のスタンドの上からほとんどみじめな成績を見るにつけ、他校の花々しい応援（本当に花々しかった。）を見るにつけて、シュンとなって、さびしくもあり又悲しかった。その時他校の生徒が、実に大きくのびのびとしているように見えた。（本当に大きかったかも知れぬ）しかしもう今はちがう。歴史がない、伝統がない（我部には私設電燈がある）と言って負けるのを当然のように考えてきた我々であったけれども。

伝統とは何？優勝旗の数か、カップの数か？それもあろう。それらは心の励みとなるから。しかしもっと大事なものは、練習をたゆまずやるということではなかろうか。どこを見てもそれら伝統ある学校は伝統の上にあぐらをかかずによく走りよく投げよく躍んでいる。伝統は作るもの受け継ぐものでない。陸上部はパッとした活動は何一つとしてなかった。しかし去年よりは人数も増し進歩もした。来年・さ来年と一歩一歩生長し輝かしい足跡を残すであろう。

P41・庭球部、**庭　球　部**

私達のクラブは、今でこそコートがあるけれども、初めは自分達のコートがなかった。それで、弥生ケ丘に作られた、練習場としては少しお粗末なコートに行って、練習するより他に方法がなかった。

満足な練習もしていなかったが、高体連には出場させてもらった。テニス部としては、初めての大会参加だけに、どうなる事かと心配したが、個人戦で、三回戦まで出場出来たのは、よい収穫であった。高体連で反省させられた事は、練習不足と遠征をしなかったので試合慣れしていない事であった。

四月に出来上る予定だったテニスコートの完成が、延び延びになって、なかなか出来上らない。四、五人のおじさん達だけしか仕事をしていないのを見ると、もどかしさで腹が立つ事もあった。待ち切れなくなった私達は自ら、くわを取り、真っ黒く日に焼けながら、土を掘ったり石を割ったりして、一日も早くテニスコートを造り上げようと努力した。しかし、雨が降って、一向にはかどらない。六月二十四日に、やっと私達

の念願であったテニスコートが出来上った。
　私達の胸は、白分達のコートを持てたという喜びで一杯だった。私達は、さっそく新しく出来上ったコートに、顧問の先生と一緒にラインを引き、練習を始めた。まだコートは柔かいけれども、長さはたっぷり取ってあるので、弥生ケ丘のコートよりも、練習しやすいように感じた。しみじみと自分のコートで練習するのは、いいものだと思った。
　毎日使っているうちに、このコートはお金をかけた割には、水はけが悪いという事と、まわりが校舎で囲まれているので、他の人からいつも、のぞかれていて、練習しにくいという欠点のごときものが現われてきた。しかしよく考えてみると、試合の時はいつも人に、見られているのだから、他の人から練習をいつも見られるという事は、度胸を養うのには、もってこいだと思われる。
　立派な顧問の先生もいられるし、真面目に、練習をやっているから、多くの試合を経験していくうちには、きっと強いクラブになるだろうと思う。いや必ず強くなって全国に長崎南高庭球部という名をとどろかせて見せると、部員一同決心して毎日練習にはげんでいるのです。

P42・山岳部、山　岳　部

　昭和37年3月、同好会からクラブに発足以来二年経ったわけだが、まだ経験不足である。登山にはおそらく、経験が大きくモノを言うであろうから、山についていろいろ論争するのは後にして、とにかく若い時にいっぱい登ろうと思っている。そういうことから、今までの登山で特に印象に残っているものを、ここに書き留めておこう。
　37年11月、雲仙登山。平井、本池両先生をまじえて一行14名。あの日は雨、雲仙の雨は冷たかった。防水のヤッケを着ているというのに雨は肩からしみこんでくるし、ぬれたキスリングが身長を一センチは短かくしたろう。そこには、〝もみじの雲仙〟も何もなかった。下を向いて歩くばかり。そうしているうちに田代原に着いた。当然そうであるように持参の弁当を開き、そこにテントを張った。雨の日のテント張りは辛い。先輩にずいぶん世話になった。そのあいだ、一方では晩メシを作ったり、カマドを作ったりする。料理がうまい事も山男の条件である。ここで言っておかねばならぬ事は、山岳部ではカレーライスしかできないと思っている奴がいる。それは大きなまちがいで、いろんなメニューが他にあるんだ。また、部員の中には放火のベテランがいて、湿っている木をなんなく燃やすことが出来た。雨の日の火は最高だ。さっそく、シャツ・クツ下・帽子などをかわかす。パンツまでやる者は、たぶんいなかたろうと思う。
　カレーライスの晩メシをすませて、たき火のまわりに小さな輪をつくって歌った。静寂を字で書いたような夜だ。しばし感傷にふける。空は真暗で、時々ひかる星がたまらなくさびしい。歌いつけない歌を大声で歌い、やがてテントに入る。4人でもろくって寝る。話がはずんでなかなか寝れない。まぶたをとじて、今日あったことを考える。山に来てよかったと思った。やっと寝ついたと思っていた頃、となりの住人がたたきおこす。「雨のもってきたけん入らせろ。」と言うので、しかたなくすみっこに入らせた。定員を二名もオーバーする。そんな時の被害者はきまって善良な人間だ。夢など見るひまもなかった。
　翌朝、小雨やまず、ガスがはりこめている。食事をすませ、テントをたたんだら、雨はあがっていた。いつも思うことだが、あれだけのものが、みるみるリュックに入ってしまう。
　夕方、いつもの生活にもどる。登山は終った。きのうの事のように思い出せる。この時もそうだったが、去年の歓迎多良登山も雨にたゝられ、金泉寺まで行ってひき返したし、初参加の高体遵の時も五家原で雨にあった。雨と縁を切らねば。
　今の望みは、部室を作ってもらいたいこと。第一に、テントやリュックその他、道具をおくところがないし、プランをねったりするのにも部室がほしい。どうしてもダメとおっしゃるんなら、体育館の横にでもテントを張ろうかと思っております。あわただしくさえあるこのごろの僕

等の暮しの中で、僕等なりのスケジュールをそれぞれに消化していった事にかぎりない喜びを思う時、風の中で唄われた歌や、夜の焚火のまわりや、激しい汗の登頂の中でつちかわれ、お互いの心の中に無言のうちに通い合う心の時を持ち得た事を、我が山岳部の存在と共に愉快に思うのです。

来年こそは、もっと我々の行程表に記される色エンピツのさまざまな線がふえ、僕等の高校生活を明るい太陽の光で飽和させながら、お互の暮しの中に打ち立てられるプランがある事を望んでいます。

P 43・ラグビー部、**ラグビー部**

ラグビー部ができて三年目。今年こそは優勝をと闘志をもって、まず四月新人戦にのぞんだが、島高に抽選負けをきした。続く高体連においても、みなさんの期待をうらぎる結果に終ってしまった。高体連から八月の末の国体予選までの三ヵ月問は三年が去った後のチーム作りと、暖さの後で各人の体力を増す期間であった。

夏の合宿なども辛いものだったが、それは貴重な経験であり、心身ともに、なんらかのうるところがあったとおもう。国体予選は三年の助力で県の決勝まで進んだが、またもや工業の前に涙をのんだ。それとともに二年生にとっては今後は今度の試合のように、三年生の助力を期待できなくなってしまうと、大きな比重がかかってくる。学校生活にクラブ活動がある以上、三年が去ったあとをいかに後輩でつぎ、今まで以上にもり上げていくかが、クラブ活動における意義かもしれない。しかしながら本校では他の部もそうであろうが、初めてのことであるので、一抹の不安を感じさせられた。

その後の成績は全国大会予選において、第一試合に水産高に敗北をしてしまった。それは我々に反省をあたえるいいチャンスだったかもしれない。我々も我々なりにその後努力を重ねてきた。冬休みも一日も休みなしに練習をつづけ年の瀬のあわだしさも感じられぬほどだった。しかしその効果があらわれてきたのか。ジュニアー戦において第一試合西高に楽勝、第二試合はみぞれと海からの冷たい風が吹きつける本校のグランドで水産とおこなった。寒さにもめげず全員よく健闘し、二十九対〇で勝ち、おおいにハッスルした一戦だったが、寒さで骨のずいまで凍え、風呂にはいってもまだ震えが止まらない者もいた。決勝戦は三菱技術校と行なって敗れてしまった。

今後は新人戦そして新しい学年をむかえて高体連、国体予選がひかえている。我々は三年が敷いた土台の上に伝統という大きな柱を土台とうまく合わせる仕事なのだ……。

《文化部》

P 44・生物部、**生　物　部**

私達、生物部は、去年四月より各班に分れて活動を行って来た。そして、十一月の文化祭には、未完成ながら、一応の結果が実験データーとなって現れた。反省を、という事であるが、その事は、たった一言で言い表わす事が出来る。それは、皆、非常に良く活動してくれたと云う事だ。特に去年の（現在もそうであるが）生物部は、部員構成において、一年生の占める割合が非常に大きかった。そのため一年生の活躍が非常に目立っている。その事は、去年の文化祭において、研究発表を作った際、約八割は、一年生の手になる物であった、ということである。毎日、部室へ来て、実験結果のデーターを集める。

そんな単調な仕事をよくやってくれた。このことは、長い年月を要する生物の研究を少しでも結論へ近づけようとする気持のあらわれであろう。それでも、たった一つ残念なことがある。それは、部員数が三十余名いる内、実際に活動しているのは、十余名にしかすぎないという事だ。こんななさけない状態は早くなくすように全員でこころがけていきたい。

しかし、種々の研究を続けて来たのにくらべて我校の生物部に対する目は、あまりにも冷たい。生物部というものを誤解しているようだ。私達は訴えたい。「もっと生物部を理解してください。解剖だけが生物部の研究テーマではありません。」と。

P45・演劇部、**チームワークで行こう！　南高・演劇部**

どんな部でも、チームワークがとれていること程、大きな強みはありません。チームワークが、がっしりとれていれば、どんなことにも負けないし、大いに自慢も出来ます。私達も、そんな部の一つとして、大いに自慢したいと思います。部員一人一人が、学校中で一番素晴しい部だと思っています。自分の部をそう誇れることは幸福だと思います。

しかし、このチームワークがとれるまで、いろんな障害もありました。最初は、演劇それ自体に興味をもって入部した人だけのクラブでした。もちろん、そんな人達は少なく、最初は部員拡張に苦労しました。演劇は少数では決して出来るものではありません。総合芸術なのですから。こうして我演劇部は、真に演劇を好きなものから、なんとなく不安な気持で入ったものが同居しながらも、第一回演劇発表会に備えてスタートしたのです。知らず知らずのうちに、一つの劇を作り上げるために、みんなの力がそして心が集中し、結ばれていきました。キャストとして舞台にたつもの、スタッフとして、カナヅチを持ち、照明道具を作り、小道具を集めるもの、メーキャップをするもの、さらに部屋の掃除をしたり、買物に出かけたりするものまでもが、自分の一つの仕事に集中し、責任を感じました。そして自分の手が心が為した仕事が、大きな一つの劇の一部として、ぐんぐんその大きさを増していくことに感激しました。第一回公演の時の感激は、今も胸に熱いものを感じます。さらに第二回の公演では、それに落ち着きと創造精神とが添加されて、さらに磨きのかゝったものになったと思っています。一年目には、キャストもスタッフがかけもちになったこともありましたが、今は、専門に自分の分担を果す程になりました。

そして、演劇などにはまるで興味もなかったものも、いつか、時計を動かす一つの歯車になれた喜びでいっぱいでした。

到達よりむしろ到達のための過程がより意義あることとは、前人より考えられうなずかれたことですが、演劇はまさにそのモデルとなるにふさわしいと思います。一つの劇をつくりあげることは、一つの人生を体験し、つくり上げることになるのです。悩み多き青春時代において、他人の人生をみつめ、苦悩し感激することにおいて、この部が高校生活に果す役割は大きいと思います。

演劇部というと、舞台に立ってセリフをいゝ、動きまわることしか頭に浮かばない人も、少なからずあると思います。そして近より難い遠い存在として意識する人もあるのは事実です。そうではなくて、どんな小さな事も演劇そのものに触れるということを入部して初めてわかることができるのです。演劇そのものを深く追求しようとする人は、現在の部員にいるかどうかは疑問ですが、学業を本分とする我々高校生にとっては、専門的にみつめるよりも、むしろ、演劇を通して、青春時代の喜びと苦悩を味わうことの方が意義があると思います。高校生の演劇の新鮮さはそこにあるのではないでしょうか。そして私達部員は、その新鮮さを大切にしています。

どんな事も自由に語り合い、何もいわずとも相通ずるものを感じることの出来るこの演劇部一家を、一人一人、こよなく愛しているのです。

P46・芸術部、**芸　術　部**

現在、芸術部には美術・書道・カメラと三つのクラブが同居している。予算や活動においてもめんどうであり、部員に三倍の労力を要する。それぞれが個々に活動しているといってもやはり割り切れないものが部員の上にかぶさって思うようにはいかない。

いづれはこの不合理から解放されたいものである。三つのクラブが独立し、それぞれ責任をもって活動することは精神的にもより活動しやすくなるのではないか。運動部にくらべて地味な文化部ではあるが、その底には相通ずるものがあると思う。そのどちらも懸命になり、目的をはたしたときのあの喜びを味わい、自己を高めてゆくことに何の変わりもないはずである。バスケットする人が、バレーをする人がボールに全部を集中するように、キャンバスに、筆に、レンズに自分の力と心を集中

する。そしてその作品をながめるとき、それがうまくかけていると、自分の作品だという満足感が、まづいと今度こそはとファイトがわいて来る。自分がどうしても思うようにゆかないとき、色や線を考えるとき、そしてそれを知るとき、このときほど自分が生きていると強く感じる時はない。

芸術部にはいって得たことは少しでも自分というものを知ることが出来たということである。放課後、遅くまで絵筆を取ってあたりの暗さにはじめて気がつきあわててかえり仕度をする、そんなあわたゞしさの中にも満足感があり、腹ぺコに重いカバンも楽しい。

この一年間、秋には盛大な文化祭が開かれたがあのときは予定通りにいかなくて残念だった。じっくりと腰をすえて作品にとりくむこともなく、いよ／＼というときになってはじめて気がついたようにあわてて出すのではいい作品ができるはずがない。計画性のないうかつさにあらためて反省させられる。来年はもっと充実した作品展であることを望む。美術、書道、カメラいずれにしても、もう少しの真剣さに欠けている。

またクラブのまとまりがなく、数人のごく限られた部員の活動にしかならなかったのはさびしいことだった。ある者だけが一生懸命になったところで力は知れているし、部員がまとまればより期待できるのではないか。文化祭には共同製作をとも考えていたが部員が集まらなかったのと、みんな自分の作品に追われてそこまではやれなかった。

今考えてみると残念でならない。のん気すぎるのもほどほどである。やりたいこと、みたいこと、沢山ありすぎて欲におぼれて結局は何もできなかったこの一年間ではあったが、三年生の助力でどうにか越して来た。ここで改めて三年生の方々に感謝したい。三年生という存在が私たちにどんなに力強くかんじられたか、この一年をふり返ってみてそれがよくわかる。

また先生方の親切な御指導で、私たちの力だけではとうていできないこともできた。

次の文化祭その他の活動において先年の失敗を二度とくり返さないように、自分たちで考え、自分たちで行動してより充実した芸術部に育てたい。心の成長ともいうべきクラブ活動から何らの成果も見られないようなことのないよう努力し、かつ楽しみながらその苦しみを味わってゆくことも大切なことであると思う。技術の進歩よりももっと大切なものを感じることができるなら、それはクラブにはいって活動した記念といえよう。

P47・茶道部、茶　道　部

うるわしき乙女数人が静かに坐っている。正面には、かけ軸がかけてあり、その真下には質素で清純なムードとかぐわしい香りをはなっている生花、そして庭のどこからともなく竹づつを通って水がぽとりぽとりと静寂なあたりを風靡するがごとくしたたり落ちている。その中でその少女達が自分を超越した心境に到達し、静かに一人の少女のお点前をながめている。また耳のどこかで水の微音をつかまえた。あたりはその音以外には何も聞えない。まるで自分が宇宙にほうり出されたかのようだ。その沈黙のさ中でしずしずと少女は歩む……。

私達部員は茶道というものをこういう中で行うものだろうと希望に満ち／＼ていた。ところがどうであろう。場所は宿直室。あのせまい部屋に25名位の少女が汗をたらたら流し、工事の騒音を聞きながら習うのである。前者と後者との違いはどうであろうか。こんな狭い部屋で、ひしめきあっていると静寂という心境に至ろうとしても無理である。それに道具だってほんのわずかなものだった。これに失望したのか65名もいた部員があっというまに15名位にへってしまった。

夢と現実が一致しない時、それを克服してすばらしいものを築きあげようとするファイトがほしかったと思う。そうすることによって、初めは苦しいが後では充実感を味わい、一層茶道というものに興味をもつようになるのではないだろうか。どんな部でも同じことだろうと思う。初めは皆「楽」ということしか考えないで飛込んでくるから「苦」という

事がわかるとやめてしまうのだろう、結局、後にのこったものはほんとうに茶道を愛する人ばかりである。

だから練習の時も自然と熱がはいる、ちょっとでも間違えば注意してやろうとでもいわんばかりに友達のやるお点前の、一挙一動にそそいでいる。あんなに狭いと思っていた宿直室もなんだか愛着を感じて、そういやだとも思わなくなった。文化祭の一週～二週間前などは皆八時位まで残って練習である。それは苦しい、だがそれを自分のものとし得た時の喜びは苦しみを吹き飛ばしてくれる。それに上級生との交わり、これもとても楽しい。先輩の色々のアドバイスー―下級生に対するいたわりー―まるで同学年のような親しみー―こういう色々な感覚を私達は吸収して、15名がスクラムを組んで今日まで前進してきた。文化祭の時皆日頃の腕をきそおうとファイトまんまん、それにてんてこまいのいそがしさ。とうとう色々な展示物を見る暇がなかった。文化祭の終った後も、ぐったりして話す気力もない。だがなんと楽しかったことだろう。

そうこうしている内に茶室ができた。広い教室を一室くださったのだ、ああ茶道部員一同、心から感謝の念を声高らかに叫びたくなった。それに、タタミまで敷いて下さった。あと一年位するときっと立派な庭もできることでしょう。そして待ちに待った本当の静寂感を味わいながらお茶を飲み、お点前をする事ができる時がくるだろう。その日が待ち遠しい。ところが残念な事に一年の部員が一人しかいないことで、我々二年も三年になったら余りされなくなるだろう。そしたらせっかくここまで築いてきた、いしずえがもろくも壊れてしまうのではないだろうか？

一年生の諸君30分の時間のスペイスがあればどうか茶道部にはいってくれたまえ、いそがしいさ中、自己を深くみつめるゆとりはないだろう。この時に自分というものを理解しようではないか。茶道はその人に落ちつきと余裕を与える。決して茶道をして損にはならない、ましてその反対なのだ、その人の人格を高め教養を深めるのだ。どうか一年生のみなさんだまされたと思って入部してごらん、二三日やっていると興味がわいてくるよ。まだ茶道部といっても本式なものの足もとにもおよばない。

けれどもニューフロンティア精神に満ちあふれている私達は反省を書くより未来を築くことで胸が一ぱいである。ですから下級生のみなさん、私達のこの意志をついで下さい。茶道部、心からおねがいします。

P48・文芸部、**長崎南の文芸部**

スタミナのある連中が集まったクラブ、それこそ、南高にその名をとどろかす文芸部である。文芸部の諸君よ、よくぞ頑張った。この一年間を振り返ってごらん。

一学期は、文芸研究誌として、「麦」の第一・二・三号をガリバンで刷って発行。夏休み中に広告取り。これは、文芸誌「佳風」の出版料を補うための、涙ぐましい努力である。態度の良さに好感を持たれて、予想以上に、広告が取れた。クラブでのしつけが、自然とにじみ出るらしい。文化祭に備えて文学散歩をしたのは、八月の半ば頃。冷房車に揺られて、一路、諫早へ。諫早公園の帰りに、滝の観音に立ちよった。音高くしぶきを上げる滝を見つめて、各々何かを悟ったらしい。同じ月の下旬、一年生は長崎市内の文学碑を訪ねて、足を運んだ。夏の次は秋。文芸部にも秋が来た。文学に志す人は、秋こそ静かに自然を味わうものらしいが、私達にとっては、秋こそ体力を消耗する季節。〃天高く……〃だから、少々労働しても、若い体はびくともしない。

「佳風」第二号は、文芸部の前途を祝して、豪華なものにしようと、初めて活版印刷にした。この時の苦労は、経験しないとわからない。それだけに、やり甲斐のある仕事である。二学期の活動で、忘れてならないのが文化祭。この時の輝くばかりの活躍は、説明の必要なし。南高の文化祭に出席した人ならわかるだろう。文芸部の展示を見そこなった人は、実に不幸なことである。一・二・三学期に、一校づつ、他校との交歓会をした。この時だけは、学校の中でおおっぴらにお菓子を食べることができ、文芸部に入部したことに喜びを感じる。

これだけやれたのは、何を隠そう、無責任部長を中心とする二年生幹部のおかげである。文芸部員は南高の模範生であるということは、誰もが認めていることであり、幹部の顔ぶれを見ればわかる。クラブの標語は、〃品位ある学徒たれ〃。女の子の多いクラブにふさわしく、部室は常に清潔に整頓され、花の絶えたことがない。信じがたいお方は、どうぞ見学に来て下さい。男女の比は三対五であるが、発言権は男子が強い。男子は大切に扱われるので、みんな健康にのびのび育っている。瞳が生きている。かわいい一年生達は、よき先輩に恵まれて、高校生活の良さが、身にしみていることだろう。四月からは、一年生にバトンタッチ。新しい若い文芸部が誕生することだろう。男女仲良く手をつないで、南高の文芸部の名を世に広めよう。次期の部長さんよ、これまでの部長さんを手本にして、無責任で且つ、模範生であれ。

P49・50・JRC、JRC

本年度に行なった活動について述べてみたいと思います。最初にやったのが花壇作りで、この時は、女子団員も鍬をふるい、我々の手で美しい校庭を作ろうと意気ごんでいましたが、残念ながら春に播いた種は切り花にするほどたくさんは咲きませんでした。しかし、六月二十九日行なった浦上学園慰問は非常に有意義なものでした。これは私達にとって初めての経験であり、果してうまくやれるのかなと不安な気持も有りましたが、それだけに準備も慎重にやり早くから計画し、おみやげの風船等を集め、紙芝居の練習をして当日に備えました。学園の門の所まで来ると子供達も迎えに出てくれスリッパを出してくれる子もいました。

皆がいっしょに歌い、幻燈、紙芝居をやりました。歌の時には私達が校歌を歌ったら、「浦上学園の歌」を大きな声で歌ってくれました。最後に運動場に出て、いっしょに鉄棒にさがったり、風船をついたりして、楽しく遊びました。幻燈の途中で二、三人に風船をあげたところが皆欲しがり始めて大混乱になったのは失敗でした。これは幻燈の内容が難しかったせいもあったので、これからはそういう面にも気を配りたいと思いました。

いよいよ別れの時には、「お兄ちゃん！、お姉ちゃん！、又来てね。さよなら、さよーならあ。」といつまでも見送ってくれました。後日に反省会を開き、園長さんからの礼状を受けた時はうれしさがこみ上げてきて「また慰問に行きたい」という気持でいっぱいでした。

十一月の文化祭はJRCは初参加であり、本当の意味でのJRCを知ってもらおうと全員真剣にとりくみ掲示物の作成、会場作りにはげみました。この時は講習を多く設けた事が特徴で、各種プリントを用意して、点字コーナー、ロープの結び方、三角布の使用法、ペーパーバックの作り方をやりました。なかには熱心な人がいて、質問したり、覚えが早いのには驚かされ、うれしく思いました。

父兄の方もお見えになり主婦の方が三角布の講習を受けていかれたりして私達もやり甲斐がありました。私達はこの文化祭は成功であったと思います。文化祭の後は友情年賀葉書と歳末助け合い運動をやっただけで活動は幾分低調でした。友情年賀葉書については十部ほどを残して三百部近くが売れ、無心ボックスの方法を取りましたが金額の方が多いという良い成績でした。売り上げ金三千三百五十三円を肢体不自由児協会へ届けました。募金の場合にJRCでやれば多額を集めるには幾分不利ですが、その集まったお金が強制されたものでなく、出した人の心がこもったお金だという事で意義があると思います。だいたいこういった事が本年度の主な活動ですが、この他サービスボックスを置いたり、アルバム作成、校内美化、工業JRCとの交歓会などをやりました。

また八月の県、市トレーニングセンターにも参加しました。これはリーダー養成が目的ですが非常に楽しく、他校との交歓、自主的な行動といった事で意義深いものでした。又、日赤・長崎県支部内に市内六校のJRCで組織している長崎市高校JRC協議会というものがありますが、長崎駅の清掃、日中米交歓会、養老院慰問、もちつき大会等の活動に参加しました。特にもちつき大会はそのすべてを自分達で計画し道具を揃

え行なったもので、施設の子供達を呼んでいっしょにもちをついたり丸めたりとても愉快でした。

南校ＪＲＣでは、美化班、点字班、新聞班、レクレーション班、救急班の五つに分け、美化班では校内美化、花壇、サービスボックスの作成等に当たり、新聞班では南校ＪＲＣ内の新聞を発行、プリントの作成等、レクレーション班は交歓会、施設慰問等の計画、連絡を役目とし、救急班は医務の手伝等をやっています。

ＪＲＣは青少年赤十字とも呼ばれ、国際的なもので、奉仕、親善、平和、博愛をモットーとし、その活動は広範囲に亘り、ＪＲＣを究めつくしたという人はいません。だから私達団員は一つの紙屑を拾い、一人の友と親しんで、私達のできる限りの能力を発揮して、物事に当たり、それによって私達も磨かれてゆくのだと思っています。私達の悩みは、活動面において試験のために流れたりする事です。が、それは私達の情熱が足りない点があるかもしれません。

それから、ＪＲＣを片よった面からしか見てくれない人がいる事で、例えば、ある人はＪＲＣは奉仕団体だと思い、またある人はレクレーションのためのグループだと思っているといったような事です。それから今の団員では男子が少ないので積極的な活動にかけるといったような事もありますので、工作や演芸などの得意な人は自分の力を生かす役立てる、といった面からもぜひ入会してほしいと思っています。私達はこれからも張り切って諸活動をやっていこうと思います。

Ｐ51

Ⅵ、一年間を顧みて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(51)
回想録　会長　平野伸人
僕の生徒会活動　副会長　中村　均
考えること　〃　中田満智子
人を求めて　会計　山下裕人
役員生活一年間　〃　伊藤　正
雑感　書記　山田恭子
書きたいことウンヌン　〃　村尾久子

Ｐ51・52・回想録

回　想　録　　会長　平　野　伸　人

回想……なかなかいい言葉だと思う。その時は苦しくとも後の思いは楽しさに変化させてくれるからだ。さて、生徒会という三字が常にぐるぐる回転している私が脳細胞を整理しつつ次の生徒会の為に過去をふりかえってみよう。

平野伸人回想録をひもとく。

昭和三十八年六月十七日、一枚の書状を学校長よりもらい僕は皆にがんばりますとあいさつした。もちろんファイト満々だった。さっそく評議会を開いたが、あっさり流会になってしまった。顔で笑って心で泣いて。その時、田中顧問はこう言った。「平野、こういうことは、これからいくらでもある、だが一つ一つ怒ってはいかん、がまんだ。くどい程、念をおして回るんだ。」と。

そして今はなき山下君を救おうという運動が始まり、僕個人にとっても仲のよかった同窓生の役に立ちたかったがむなしかった。弔辞はもう読みたくない。一カ月はあっという間だ。夏は原紙が弱くプリントが刷りにくかったことをよく思い出す。

二学期。創立祭一色だった。体育祭と文化祭。初めての大がかりなものだけに、特に体育祭等は大平先生はじめ先生方におんぶされどうしだった。この前後が私の生徒会長としてのスランプの時期だった様だ。何しろいささか精神的にも、身体的にも疲れていたと思う。ファイトをなくしそうだった。現実逃避の様子さえあった。「がんばろうぜ。」「がんばらんね。」役員の皆から言われることもあった。ともかくやった。

三学期、再びもりもりとファイトがわき、ああ青春の血はもえて、予餞会。いろいろの事情で無理かなと思ったが、うまいことといった。卒業生の人達からひどく感謝されてうれしかった。そして卒業式。

総会を開いた。いささかコウフンして人間の未熟さを出してしまった。地が出ちゃった様である。しかし会則に修正はだいぶん加えたつもり。新入生の参加、我々の仕事は現在進行型。その第一は専門委員会。評議会は何十回と開いたのに委員会がダメ。しかしこれからは必ずやるつもりだ。

……ざっと主なものをとりあげてみた。生徒会って奴はいろいろと仕事にだけはことかかぬ。いつも会室はプリントとモゾウ紙がハンランし、我々は大きい声をはりあげるし、何ともさわがしい室ではあった。その中で得た経験は二度と味わうことのできないものの様だ。僕は人の知らない苦労をへて、何で俺だけこうやらにゃいかんのかと、そして何の為にどういうつもりで？そんな疑問をくり返してばかりいた。何事も経験だと思うのだが。

そもそも私こと平野伸人は、内気で純情、もの静かな文学少年？　だったのである。しかるに、生徒会長という名称は、我をして、友人の言によると、「お前もズーズーしくなったなあ。」という人間に、変えてしまったのである。そして変わらなかったのは熱しやすいという点と、すぐ自分一人で決めちゃうという点だろう。独裁者はその有能なるものは時として一代の英雄ともなるが、無能なるものは始末におえない。オーバーな表現にしても、僕は他の役員連にはあつかいにくかったろう。人に相談する、大切なことだ。熱しやすい、これはしかたがない。

本部内は男尊女卑？本当は全員フェミニストなのだが、すぐにああしろこうしろ。すみませんでした。

さていくら書いても書ききれない程だが、会員の皆様、オロカな私によくここまてついて来てくれました。もう少し付き合って下さい。それから指導して下さった田中、井元両顧問、本当にありがとうございました。

この会誌作成の際、祖母の死にあい、迷惑をかけてすみませんでした。残り任期に全力をつくします。

P53・僕の生徒会活動、僕の生徒会活動　副会長　中村　均

僕が役員になったのは昨年の6月、正直な所役員になる一秒前までは、生徒会なんかには全然興味がなかった。役員になった動機は、何かがやれそうだという気持からだった。しかしいざ活動を始める段になって、その組織の複雑なのに少なからず驚いた。

「やるぞ！」と叫んではみたが、何からやっていいのかわからない。役員七名集まって「う～ん」と、うなった結果生徒会報の作成から始めることにした。その会報も現在では8号、まずい字ではあるが一年間の足跡を印して来た。

今考えて見ると短かい一年間ではあったが、いろいろなことがあった。中でも一番楽しく又少しばかり辛かったのは創立祭の準備だった。

僕が受け持ったのは体育祭の準備だった。何といっても初の体育祭ということで、是が非でも、成功させねばならん！という決意の下に体育の先生以下役員数名は「南翠」のまずいチャンポンを晩飯がわりに夜おそくまで頑張った。

その結果他校に一歩も劣らない体育祭を開催することが出来た。終った時の僕の気持は（やった）というのと同時に（やっと終った）という気持だった。

このことで僕が学んだことは、表面に出て活発に仕事をするのもいいが、陰でじみな仕事をコツコツとやるのも又別の意味でいいものであるということと、チャンポンを四日も五日も続けて食べるのには大変な努力がいるということだった。

もうすぐ任期も満つるけれども、別に大した事故も無く無事に務め終えることができて大変うれしい。僕が役員としての経験を総合して会員の皆さんに、僕の意見として残しておきたいのは、「生徒会は、僕や少数の役員の力ではなく、会員の皆さん一人一人の力で活動し発展して行くという自覚を強く持ってもらいたい。」ということです。特に評議員の皆

さんにこのことを強く言っておきたい。そんなことはあたり前のことだが、あたり前でなくなりつつある。

評議員を集める時、「〇〇で評議会を開きますから、評議員の方は集まって下さい」と言う、何で僕達がこんなことを言う必要があろうか、（下さい）なんて言葉はお願いする時に使う言葉だ。僕達が評議員にお願いする理由なんか全然見当らない！

評議員の人達は毎日でも生徒会室に来て本部役員の活動状況や次の議会が（いつ・どこで）開かれるぐらいはちゃんと調べていてほしい。できれば会員全員にそうしてほしいが、それはちょっと無理だ、だからこそ会員の代表である評議員は直接本部の活動に接しておく必要がある。たまに評議会に出て、本部の案にケチをつけるだけの評議員なら、むしろいない方がスッキリして気持がいい。

僕達は順調にいったら、一年もすると卒業だが、南校生徒会は南校の歴史が続く限り共に発展して行くだろう。後輩諸君！現在の生徒会は生まれたばかりの赤ちゃんだ。より強く正しく導いて、りっぱな大人に育てて下さい。

P54・考えること，考えること　中田　満智子

私が生徒会役員になったのは昨年の六月、あれからはや一年近く過ぎました。何でもやってやろう！そう思ってなったものの、クラブ活動と生徒会、そして学習を成立させることは容易ではありません。そして私はついに自分の思い通りに成立させることができませんでした。

この一年間、私には何かが欠けていた。それは何だろう気魄と情熱か、それもある。しかしもっとも欠けていたものは、理想だと思う。希望と言いかえても良い。高尚な理想……これこそ私達、若人にとって一番必要なものだと思う。この理想が欠けていたばっかりに私は自分の思い通りに何事も行い得なかったのだと思う。

人は雑用に追われていると、とかく自分というものを見失いがちである。自分に真剣にいどむ時を失いがちである。私は、今、高校生活二年間をふり返って見て思うことは、自分をもっと大切に扱えばよかった……ということである。

私は皆さんに声を大にして叫びたい、人の犠牲になるな、まず自分、それから他人だ。私は、南高生にはまだ私のように、自己に真剣にいどんでいない人が多いように思います。自己に徹すること―これがひいては、新生・長崎南高の将来を明るくすることなのです。

この意味では、生徒会役員になることは、ばかげたことかも知れません。確かにこの南高のように、学問を究めることが人格形成の道だ、とする学校では、忙しい生徒会活動などに身を投じるのは、ばかげたことであるかもしれません。しかし、それならなぜ学校は生徒の自治活動を奨励するか……。私が今、ぶつかっている疑問は、このことです。生徒会役員になるのは、得か・損か、この疑問は今の私には解決できません。

P55・人を求めて、人を求めて　山下　裕人

この一年間の一番の思い出は選挙管理委員になって七名の立候補者を出したことだ。そのいきさつを書いて見る。

まず会長の平野君、彼とは同じクラスなので、説得とまではいかないが、立候補の話しをして立ってもらった。はじめ会計の予定だったが、会長になりてがないので、頼みに頼んで会長になってもらった。彼はよく期待にこたえてくれた。今までの会長のなかでも一番きれるのではないかと思っている。

次に副会長の中村君。彼は、一年の時に、ぼくのとなりのクラスにいた。その時から少しばかり彼の性格をしっていた。うわべは、おとなしく、無口だが、内には気魄と情熱を秘め一旦事有らば、その根性をいかんなく発揮する彼、こんな人こそ副会長にはぴったりだと思い、必らず立候補させようと意気ごんで話しをすると、案外、簡単に承知してくれた。さあ、あと五人である。

副会長の中田さん、彼女とは選挙管理委員になって、はじめて知り合いになった。新聞部室ではじめて会った。なかなか感じのいい人だなと思った。二言三言話すとしっかりしたことをいうし、新聞部では副部長クラス、よしこいつも立たせようと思ったが、その日はあまり急なようで話しださなかった。次の日、偶然廊下であったので、立候補の話しをした。(今から考えて見ると、本当にあのころのぼくは心臓だったと思う)彼女もいろいろとならべ立てたが、ぼくのあつかましさに閉口したのか、南高を発展させようと思ったのか、とにかく出馬を約束した。やっと三人かたずいた。

三人まではどうにかうまくいったがあとの四人は、なかなか骨をおった。生徒会役員になってくれないかというとまるで侮辱されたかの如く、いやな顔をして「おことわりします」とか、「あんなばかなのに誰がなるか。」とまるでこっちを、馬鹿あつかいする人もいた。そんな時が一番いやだった。なぜこんなことをしなければならないのかと思ったりした。いくかくやりで委員長という肩書をもらったからしかたがないと思いなおして、どうにか四人ひっぱり出すことができた。

さて書記の村尾さん、一年の時同じクラスだった、経験があるというので立候補を進めた。その時彼女はこういった。「私に役員になる資格があるかしら」と答えた。「君に資格がなかったらだれにあるんだい。」ぼくの答えに気をよくしたのか、すなおに承知してくれた。残るは三人。

さてもう一人の書記の山田さん。本当はこの人を出そうとは思っていなかった。彼女と同じクラスの人に出てくれないかといったが断わられた。よし、あとは手あたりしだいに聞いてまわろうと思った時に山田さんが近くにいたので、まあきいても、損にはならんだろうと思って立候補の話しをすると、ことわるでもなく、承知するでもなく、にえきらない返事をした。出てもいいと思ってるのだなと判断した。あとは押しの一手である。女を相手の押しはしんどかった。

次はいよいよ会計だ。ぼくのクラス一組と八組は、同じ男子クラスのせいか、いろいろと比較された。それで一組から一人でるから八組からも一人だそうと思った。八組の人に話しにいったが結局だれもでなかったが中の一人が伊藤君をおしえてくれた。頼んで見ると「出てもいいよ」とすぐ話しがついた。あと一人だ。

ところがこの一人がなかなか出てこない。選挙期日は迫るし、旧役員の人からはきかれるし、とにかくこまった。それで友達をかたっぱしからあたった。いまからふりかえって見ると全然知らない人にあたった方がよかったかも知れないが。友達に立候補を進める。「経験がないから」と断る。「だれでも最初は経験がないさ」と押す。「おれより立派な奴がいる」とさらに断わる。つまらない「無知の知」を出してさらにおす。「生徒会役員になっても、何の利益もない」という。ぼくは、えたりとばかり、役員になることの有益さをとうとうと論じる。こういう調子でとうとう断わる理由がなくなると彼等はついに切り札を出した。「じゃあなぜ君は立候補しないのか」と、これにはこまった。「選挙管理委員だから」と断わってもどっこいそうはいかない。相手は選挙管理委員でも立候補できることを知っている。ぼくはしっぽをまいて退散する。こんなことが二、三日続いた。僕は考えた。「なぜ自分は立候補しないのか」と、立候補しない理由がなかった。おまけにあと一人でちょうど七人、期日もちょうど間に合う。副管理委員長の佐野君に、あとのことを一切まかせて立候補した。前の管理委員長の人はつらかったといってたが、ぼくは時には不快にもなったが、たいへん楽しかった。あつかましいからだろうか。

P56・役員生活一年間、役員生活一年間　　会計　伊藤　正

何もできないうちに一年間がすっと通り過ぎたような感じだ。最初は、前会計の人のように巧く会計の仕事を務めて見たい、多数の人の前で話すことに慣れたい、学校という一つの大きな集団の中枢でもある生徒会本部役員として働いて見たいと思い、生徒会会計という役に着

いた訳である。

初めのうちは大変張り切っていたのでわからないところがあるとすぐ顧問の先生に聞きに行ったりして仕事も大変円滑にいった。しかし、日も過ぎ月も立って行くうちにしだいに難しい問題が出て来た。先生に聞きに行ってもはっきりした満足な解答はしてくれない。だからといってこちらだけて決めるわけにはいかない。しかたがないからそのまゝ留めておく。そういうものがいくつも来るとだんだんとやる気もしなくなり仕事もたまってしまう。しかし、そういうものが一つでも片づいた時にはうれしい。

今年はやっと生徒が一年から三年までそろって一人前の学校となった。体育祭も大きなものが行えたし、初めての卒業生が巣立つというので卒業生激励会もした。今年も前後の二期にわけると外側から見て活発だったのは後期のように思われる。しかし前期は皆の目には目立たなかったかもしれないが他校訪問、他校からの訪問、中でも活躍したのは生徒会報であったろう。前後を通じて最も多かったのは募金だったろう。役員も集まるたび毎に、「今度の生徒会役員は募金でもっている。」などと言い合っていたものだった。生徒会報が後期の後半頃になって、他の仕事のためにとだえたのは残念だった。

役員をやってみて、良かったと思う点は、こういう仕事が他から見るのとは違って、難しいということがわかったし役員でなければわからない苦労がわかり。良い経験となったこと。人前で少しは楽な気持で話せるようになったこと、など。辛いと思った点は自分の学級の者と一緒に行動する時間が少なかったこと。しかし、これは仕事がたまって面白くなかった時のことだけで仕事がスムーズに運んでいる時は別にそういうことは感じなかった。下校が遅くなるということについては辛いとはおもわなかった。

もし今から二年生になるのだったらもう一度やって、一層立派に役目をはたせるようになりたいとも思う。来年度の役員も我々が行きあたったのと同じことなどが出て来たり、また何度もやめたいと思うことがあるに違いないと思うが、それをみごとに克服して我々よりも一層、立派な役員に、なられることを希望する。それには全生徒の協力が最も重要だと思う。生徒会役員と全校生徒の協力でますます立派な南校を作り上げたい。

P57・雑感、雑　感

書記　山田　恭子

月日が立つのは早いもので、私が役員になってから、そろそろ一年になろうとしています。

最初、書記の役目はただみんなの意見を記録さえすればよいのだから、私でも大丈夫やれるだろうという安易な気持で引き受けました。しかし実際はそう簡単なものではありませんでした。皆の意見があまりよく聞きとれなかったり、要点がよくつかめずどのように簡潔にまとめていいのかわからず、それを考えているともう次の意見が出て、書き落したものもあるようです。

一年をふり返ってみると、ほんとをいうと私は生徒会の仕事をあまり熱心にはしていないようです。でも他の役員の方が熱心な方ばかりでしたので、一年間無事書記という役目を果たすことができました。

一年間私なりに書記を務めて感じたことは、一体私が評議会議事録に記録した意見は、生徒全員の意見なのだろうかということです。そして多くの人が生徒会というものに無関心で、何か特別な機関で他の生徒とは関係がないと思われているような気がします。評議会で決定されたことを知っている人がはたして何人いるでしょうか。生徒会とは生徒全体団結した組織ですから、役員その他の代表者の何人かのみが、いくら活発に動いても、あとの生徒全員がついていかなかったら、なんにもなりません。

最後にみなさんにお願いしたことは、もう少し生徒会というものを特別な機関だとは思わないで関心をもってほしいということです。

P58・59・60・書きたいことウンヌン　書記　村尾　久子

私達役員七名が活動し始めて、約一年近くになる。私に与えられた役は、書記という至極私とは縁遠い苦手中の苦手のものであった。書記という役にも不安を感じたが、それ以上に生徒会という生徒全部の代表となり、みんなの先頭に立って行けるかしらと、自分白身を疑った。

しかし、それと共に、高校生活というものに疑問をいだき、絶望しかけていた（少しオオゲサ）自分を、この生徒会役員という一つの道で、いくらかでも救うことができるのではないか、と星を求めて……。では、一つやってみるか、ということで引き受けてはみたが……。いざ仕事にとりかかってみると、書記という仕事も案外と取付きにくいもので、記録を執るだけが書記の仕事ではなかった。（ヘンナ子、アタリマエノコト言ッテル）プリントしたものは、そのつど帳面に貼るなりして整理しておくとよかったと思う。又、後々のためにも小さいことでも、もっとわかりやすく明細に記録を執るべきであった、と後悔している。そして、私が記録をとった所を後で読む人が読めるかしら、と少し心配である。「生徒会報」も八号までと、号外を一回発行したが、「誤字が多い。」「字がきたない。」というような批判があったが、「字がきたない。」ということは、役員の中には、私よりも浅ましいお方がいらっしゃるということをお忘れなく。（前半は、だいたい役員が順番に書いたもの）

一年間を通してきた仕事の中で一番嬉しかったことは、「三年生激励会」が思った以上に成功したことてある。会が始まる前まではどうなることだろうと心配であった。しかし会の後、生徒のみんなが言っていることや、三年生の方が、感激して涙が出そうだった、というのやらを聞いて、ほっと胸をなでおろしたものである。しかし、後日、この会のアンケートをとった中に、「司会には、もっと美人を。」というのがあった。（こういう声が出るのではないかと予想はしていたが）これには事実〝カックン〟と来てしまった。自分の一番痛い所を〝ブスリ〟とやられたのだから。まさに本当にあった〝話〟である。書きたくないが、しかたがない。

他に、「大運動会」「文化祭」の準備などやったことをいちいち上げているときりがない。そして、先日私達役員初めての大祭典？「総会」が行われた。「総会があって初めて〝生徒会〟というものに接することができて……。」と発言した一年生がいた。私はこれを聞いて情けない気がした。総会がなければ〝生徒会〟というものを認識できないのだろうか。そして、この一年生がいう〝生徒会〟というのは、その人の口調から察すると、生徒全部をさす団体ではなく、私達七人の役員が組織する生徒会本部を意味するのではないかとも思われた。確かにこのように生徒会というものをよく理解せず、本部は単に有名無実のものと思っている生徒がどんなに多いことだろう。「生徒会は、何ばしよっと？。」と私に問いかける人がいる。私は、無性に腹が立って来るのか、それとも自分自身に情けなくなるのか、問に対していつも無言である。何も言いたくなくなるのである。宿題で忙しい休み時間も一階から三階まで「評議会」開催の御触れをして駆け回っても、「欠席者多数のため流会といたします。」と出席者にすまない思いを何度させたことだろう。（クシュン！）クラスの代表者でさえこうである。

〝生徒会本部と生徒との間を密接にする〟ということが、私達役員に課せられた大きな問題であった。

しかしどの程度の接近があったかは、先日の「総会」を見てもわかるように疑問であると思う。

「なんのために自分は、役員になったのか？」と、何度も自分に問いかけたことがあった。何度もいやになることもあった。しかし、今心に残っていることは、楽しかったことや、自分も他の役員といっしょに仕事をいくらかでもすることができたということである。しかし、私が仕事をしたというのは、先生から言われたこと、他の役員から頼まれたことなどをやっただけで、たいした仕事はしていない。もっと積極的に、自主的に自分からやるべきであった、と後悔し、先生方や役員の方達にも

悪かったと思っている。しかし、役員という一つの経験を持って、プラスにはなっても、マイナスにはならないだろうと信じている。

生徒のみなさんへお願いしたいことは、自分から自発的に生徒会室にもやって来て、関心も持ってほしいことである。それには、一度役員になってみることだと思う。

だらだらとよけいなことを並べたてたが、最後に一つ。この「生徒会誌」を作るにあたり貴重な時間をさいて、原稿を書いて下さったみなさん、本当にありがとうございました。特に三年生の方々には、受験前だというのに無理やり押しつけたので、憎んでいらっしゃることだと思います。お許し下され。　▲乱文にも

Ⅷ卒業生の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(61)

P61・　**三年　一組**

石川　東　一に勉強、二に勉強、三がなくて、四に、めし。
大野　利征　子、曰ク「良く遊び、良く……べ。」点線は勝手に想像せよ。
木村　義昭　望みなきに非らず。
竹村　保英　忘却とは忘れ去ることなり。(君の名は?)
朝永　和治　今のうちさぼっているとハイそれまでよ!ガチョン
秦　徳秀　苦あれば楽あり。おおいに苦しんでおけ!
青木千鶴子　人を信じることができ人からも信頼される人になって下さい。
赤司　征代　前を向いて歩こう!
秋山　直美　〃力を尽して、狭き門より入れ〃
石川　峯子　人生は長いのです、大いに失敗して下さい。
井手　和美　勉強、スポーツ共に、日本一の学校になるよう努力して下さい。
今村由紀子　努力に努力を重ね、目標を達成して下さい。
浦里　通子　常に開拓精神を持って南高をもちあげよ。
大原　恵子　悔いのない学校生活を送って下さい。
小川キヨ子　毎日毎日を有意義に過して下さい。
川内　洋美　一時間、一時間の授業を大初に!
坂本　奎子　勤勉は苦しい根なれど終りに甘い実を得る。
陶山　恵子　一致団結。
瀬崎三保子　理想をかかげて前進せよ。
瀬戸美智子　誠実。
鶴田　征子　自分を信頼できる人、大切にすることのできる人に!
鳥羽瀬弘子　いつまでもお元気でがんばって下さいね。
富永　裕子　健康で明朗、品位ある南高生であれ!
塘地奈保子　どんな暗い夜でも、明けない夜はない!がんばって下さい。
中村三千代　どんな苦境に陥っても自分をしっかり見て自分の道を進んで下さい。
新谷　信子　南高魂に栄光あれ。
野副千鶴子　南高生だということに誇りを持ってガンバレ!
野田真知子　秋草の小ささは小さきまゝに咲きますよう。
野中かつ代　努力は天才にまさる。
浜田　政代　まず健康、それからはげめ学習に!
林田　陽子　御幸福に。
平山　淑子　楽しい思い出となる様な高校生活を送って下さい。
広田久美子　悔いのない学生生活を。
松尾　元子　戦いの中の英雄であれ。
松園　訓子　辛苦を通して歓喜に至れ。
三浦のぶ子　高校生らしい新鮮さを失わないで。
峰　静香　品位ある学徒たれ!
森田喜美子　三角形の底辺の一員として努力して下さい。

山崎　倭代　花に露、人に愛。
山道　貞子　笑は人生の潤滑油です。どんな苦しいことにも笑をもって進んで下さい。
横川　朝子　礼節を重んぜよ。
吉田　敬子　コンプレックスは地獄への坂道―勇気と自信で……。
吉田寿美子　失意の時こそ勇者であれ！
吉村小夜子　この道より我を生かす道なしこの道を歩く。

P62・三年　二組

本田　政光　健康に注意して勉学に励んで下さい。
森田　利夫　強き者、汝の名は女なり。
光安　敏夫　頭と体を鍛え明るく学校生活をおくれ。
山口　政和　悔いのない青春時代を送り母校を天下にとどろかせよ。
池内　宗洋　健康に注意し、悔いのない高校生活を送って下さい。
内田・正治
宇田川　泱　第一回生の伝統を守れ！
八尋　重義　ガッチリした基盤の上に伝統の城を築け！
中村　宜彦
田平　利博　精心一到、何事か成らざらん。
小川　弘隆　僕は期す！今後の南校の発展を。
岩谷　湍　……無言……
佐藤　雅美　明かるく生きよう青春を！
高比良嘉房　前進。
浅沼　進　サヨナラ。
太田徹太郎　失意のぼくをいつも変わらず慰めてくれたのは、そうだ、ポオー全集とエルヴィスのドーナツ盤だった。
小坂　吉弘　人間一代、命は一つ。自分の信じた道をとことんまで突走って下さい。

本庄　勝　勉強、勉強、勉強、人生は勉強につながる。
安田　政男　後悔せぬよう今から用意周到に。
村岡　正樹　遂に見えない手錠がはずされた。
吉村　浩　勉強できない奴には失恋をお勧めします。
小島　善則　人一能之、己百之。
木元　一臣　雪に耐えて梅花麗かなり。霜を経て楓葉紅し。
原口　義和　初心忘るべからず！
川崎　義昭　見よ！足もとを。（十円落ちとる！）
中村　和彦
鈴木　常司　僕達は人間です。あくまでも人間として生きましょう。
高塚　鎮昭　ほそぼそと命をながらえております。
前川　満　やりたいことをやり、なりたいものになるべし。
池田　靖子　より高い校風を！
池本　咲子　生きること、愛すること、信じること！
河原　禎子　低回、去るに忍び難し。
清成　直子　男の子は夢を、女の子は幸を。
隈井　敦子　常に自分を失わないで真実一路に歩んで下さい。
小倉千穂子　大きい人間になれ。
佐藤　明子　今日一生懸命勉強して下さい。
下瀬　栄子　自己を見つめて見失うことなかれ。
関　きみ子　青春の夢に忠実であれ。
常岡　早苗　自分に忠実であれ。
浜崎千鶴子　It is never too late to mend.
森　スミ子　努力と忍耐をもって頑張って下さい。
森　雅子　いつもほほえみを。
森田久美子　「すなおさ」を忘れないで。
山川　好子　今日をとらえよ。できるだけ明日に頼らないで……。

P63・P64・三年　三組

赤枝　宏　感動して詠める歌一首、われと来て遊べや学の無いをのこす。
荒木　駿介　すべてに理想は高くあれ。
荒木　宏匡　ダルマのように決してへこたれないで起きあがってくれ。
石橋　直　高校時代に一度でもよい感激を味わうべし。
池田　忠彦　自主自律一意恋愛に精進せよ！
奥田　裕也　皆さん仲よく勉強して下さい。
草場　秦之　パントを飲んでハッスルしよう。
久保　政二　南高生であることを忘れないでね、ほんとよ。
酒井　恵介　遊べ、学べ、そしてガッポリとハッスルせよ。
木原　稔夫　自信を持って物事に行動せよ。
酒見　善輝　「人生航路不有平坦」てなこと、トイレでも頭に浮かべてもらうとけっこう！
桜永　友信　初志貫徹！
佐藤　和隆　七転八起。……無転無起。人生は快楽にあり。女性尊重は適当に。
七里　成徳　「吾将ニ尾ヲ塗中ニ曳カントス。春眠不暁ヲ覚エズ。」
杉本　道彦　思い廻せば浮世は鏡、笑い顔すりゃ笑い顔、タダシこの世で一番かんじんなのはステキなタイミング！
須堯　敏文　若い君達に禁物は生温い空気。
竹本　武仁　では、ここでお別れしよう。今日もいい天気らしい。
田中　茂　高く誇らん母校〝南〟
中川　勝克
中村　喬次　階段は一段、一段着実に登れ。
中村　昇　追いつき追い越せ、常に前進。
中山　雅一　〝自分自身に勝て〟
早水　茂雄　母校より見下す夕焼け日本一。こんぎゃんよかとこ、めったになかばい。
久富玄三郎　一言も言えないんです。感激してしまって。
平山　晃　信(真)ずるところ必ず栄光あり、人生のレギュラーとなるなかれ、敷石となるべし。応援団長。
藤原　清一　無念　無想　無我。
堀　俊行　一筆啓上火の用心、阿仙涙かすな馬肥やせ。
原　深　スピードは孤独を愛す我にあり。
松本　孝範
山口　雄三　今になって「理想は高く気魄と情熱に燃えよ」このコトバが好きになりました。じゃごろと一緒、このコトバの下に集って下さい。
吉田　茂生　できることならこのままずっと南高にいたいなあ！
井石　道子　恐れを知ってしかもそれに恐れざるものこそ真の大勇者であるということばの通りに進んで下さい。
井上由美子　一歩後退してそのときの自分をみつめよう。そして前へ進め。
岩本三枚子　初心を貫き得る人になろう。初恋も一緒にやりぬこう。
大橋由紀子　我々は人よりしてもらう前に何を人にしてあげられるかを考えよ。
桐野　雅子　自分の道は自分で切り開かねばならないということを頭において何事にも努力して下さい。
隈部　和子　この道より我を生かす道なし、この道を行く、ことなれこの道はこの道でも、いつか来た道です。
辻　邦子　自分を見失わない生活を送って下さい。少しぐらいは見失ってもさしつかえないことがあります。
松岡　和子　昨日の私たちは今日の私たちであってはいけないと思います。一歩でも前進。又前進。
溝添　智子　理想（目標）に至たる努力をしよう。

横田真佐子　過去の人も、私達と同じように恋に悩み、それを克服して、こうして私たちを残してくれていることを思うと、高校生時代に「考えて」勉強できないというのはダメだと思う。

P65・P66・**三年　四組**

赤岩　芳彦　夢をもとう、日記をつけましょう。
赤尾　真也　希望をもとう。
伊藤　憲明　真の価値ある人間になれ。
伊吹多喜矩　初志貫通。
大久保雄司　よく学び、よく遊び、一意学遊道に精進せよ！
太田　重隆　学絞の名声の為にせいぜい頑張れ！
太田　益夫　最後の一秒までがんばれ、決してあきらめるな！
大坪　英治　真実のある人であって下さい。
岡本　正敏　茄子の花と師の意見は、千が一つに無駄がない。
荻原　滋　時代の変化はつらいもの「天は人の上に人をつくり人の下に人をつくる」されば惑わず惑わず勉強するべし。
加藤　威光　目標に向ってくいのない高校生活をおくろう。
川津　員和　勝った喜び、負けたくやしさ、試合は勝たねば、この手で。されば、勉学も亦同じ、負けてなるかよ、くぢけちゃならぬ。運動部員ヨ、頑バレー。
桐山　利弘　前進、後退そして進歩。
久保田　智　何事にも自信をもて。
栗原　和夫　初志を貫け！
黒川　攻　充実した人生は充実した死をもたらす。
犬童　恭二　諸君、運動、勉強にハッスルしましょう。
坂本　昭雄　明朗な人になろう。
柴田　光義　楽しき高校生活を！
柴野　泰　よく学び、よく学べ！
瀬藤　一彦　人を外見だけで判断するな。みかけによらぬこともある。
高橋　正行　環境にまどわされず自分の道を行こう。
谷口浩一郎　人学ばざれば道しらず。玉みがかざれば器をなさず。
玉田　哲彦　若さに潜む可能性よ、たくましくあれ。
時津　政憲　対立と排他は滅亡の元、和解こそ人間平和への道。
野　浩　たえず時間は流れる、自分の先を見きわめよう。
永田　三雄　何をか欲し、何をか得るべし。
野田　正美　自己を大切にしたまえ。そう、いつまでも…。
馬場　裕次　誠実こそ世の中を動かす。
林田　紀夫　白分の力を信じて、行動せよ。
東島正八郎　常に理想めざして機関車の如く驀進せよ。だが脱線する勿れ。
深町　寛朗　私は、本日欠席しました。
福島　藤平　感無量。
藤崎　晶三　楽あれば哀あり、苦あれば喜あり。
古川　源蔵　何が私に幸いするか私には全くわからない。
松田　俊朗　曰ク「同じアヤマチを二度と侵すな。」
的場　武義　一生に一度、自分の力をためせ！
三田　道昭　千丈の堤も蟻の穴を以って潰ゆ。
森永　隆昌　純情で強健な気骨のある畜生となれ。そして、旧制校にあった精神をもう一度南高精神として校風として作るべし。
山口　正一　何を行うにも何事においても自己のベストを尽くす様に。
山田　用次　ハなづらい過ぐる月日を思ほえで花見てくらす春は少なき。
渡辺　文治　勉強して体をこわすことはまずない。真面目にがんばろう。
岩崎　早苗　高校生活は明るく健康的に送ろう。
小田　隆子　花咲く春が来ることを信じて努力する樹の様な人になろう。
川端　睦　よき学生たれ。
河部　恵子　何事も全力を尽くし、計画的であること。
谷口　敦子　前進せよ！　あせらずしかしたゆまず。

峰　隆子　努力こそ最大の武器。

山領　喬　何も無し。

長崎　一誠　くいのない高校生活を！

Ⅷ卒業生に贈る言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（67）

P67・卒業生に贈る言葉

佐藤　勇　わからなくなったら出発にもどる勇気を!!

梅田　和郎　よく考える。そして、断を下せ。

辻本　義典　品性の美は凡ての美中の最美なるもの

林田　光晴　美しさはいつもどこにもあるものです。

大平　兼男　信念をもて、

平井　誠一　誠実は人を動かす。

石田　泰照　卒業おめでとう。心身ともに健康であることを祈ります。

清水　猛　自己には厳しく。

原　宮之　やるぞ　みておれ。

一瀬　栄次　人に頼まれたならば、その結果を報告することは、それが小さいことであるだけに大切なことだと思います。

平塚　俊克　懈怠の時には生死無常を想え。

坂東　一郎　日新日進。

藤原　康衛　生きよう共に。ハッスルしながら。絶えず創造しながら。しかもねばり強く。

菊永　武行　誠実。

本池　英俊　温故知新。

田中　重正　南高一回生として大いに頑張って下さい。

黒木　虎明　健康。

富永　禎一　常に希望をうしなうな。

広瀬　方人「健康であること」、平凡なことですが、体をこわしては何も出来ません。体に充分気をつけて下さい。

吉野　和之　人間らしく生きましょう。

栗山　輝雄　省顧脚下。

板山　勝城　あと一歩前進せよ。

森　寿美子　心身共に健康であれかし。

安部　裕　頭をカキカキ何でもやってみよう。

前田美智子　自信と勇気。

吉成　稔　己所不欲、勿施於人。

吉川　雄幸　家天愛人(天を家とし、人を愛せよ)

斉藤　一朗　四河浦に入りて後、河の名なし。

山田　康弘　誠者天之道也。誠之者人之道也。

井元　保一　ボヤボヤするな、ファイト／ファイト！

村川　有　信念を貫け。

椋本久美子　Be true to yourself.

山下　二　むねをはって、かおをあげて、うまず、やまず。

友永　仁　もっと大きく、もっと力強く、もっと美しく。

増田　慶蔵　踏まれても根強く歩め道草の何時か花咲く時も来たらむ。

広川　清也　大きな夢を抱こう。

有田　敏子　いつの場合にも誠実と情熱は忘れないように。

波多江利雄　克己。

藤田　光　人間は、かれが住んでいる世界を本当に知っている場合に、自由なのである。

Ⅸ先生方の住所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（68）

P68・69・先生方の住所≪　名前のみ・50名　≫

古川　憲介、佐藤　勇、有田　敏子、黒木　虎明、大平　兼男
大脇　勘治、石田　泰照、林田　光晴、椋木久美子、坂東　一郎
増田　慶蔵、富永　禎一、梅田　和郎、清水　猛、浦川　有作

渡辺 真砂、友永 仁、藤原 康衛、平井 誠一、田中 重正
栗山 輝雄、広瀬 方人、菊永 武行、一瀬 栄次、前田 真澄
安部 裕、藤田 光、田中 正明、水上 経弘、吉野 和之
吉成 稔、平塚 俊克、井元 保一、宮本 義久、斉藤 一郎
波多江利雄、村川 有、辻本 義典、戸田 卯康、本池 英俊
吉川 雄幸、山下 二、板山 勝城、山田 康弘、広川 清也
原 宮之、前田美智子、森 寿美子、堤 堅、井手 信重

※参照・

後掲の「**昭和38年度・教職員写真**」も参照してください。

昭和38(1963)年四月・３回生入学の春。撮影。

Ⅹ長崎県立長崎南高等学校の歩み・・・・・・・・・・・・・・・・・・(70)

P70・**長崎県立長崎南高等学校の歩み**

昭和三五(1960)年十一月一日
　長崎地区県立新設高等学校創立準備委員長・古川憲介
　同　委員・堤　堅　任命せらる
昭和三五年十一月十一日・第一期工事（校舎）着工式をあげる
昭和三六年(1961)三月九日・長崎県立長崎東高等学校、同長崎西高等学校と合同して入学者選抜試験を実施
昭和三六年三月二四日
　長崎県告示第一四七号　長峰県知事　佐藤　勝也
　県立高等学校を、昭和三六年四月一日から次のとおり設置する
　　１名称・長崎県立長崎南高等学校
　　２位置・長崎市上小島町高僧都五五五番地
昭和三六年三月三一日・第一期工事（校舎）竣工
昭和三六年四月一日・・長崎県立長崎南高等学校開校
　初代　校長　古川憲介　任命せらる。
昭和三六年四月一〇日・入学式挙行・定員１８０名（男女共学）・
　第一学年入学生　１９６名（男子１２７名・女子６９名）
昭和三六年五月二日・・P・T・A　結成
昭和三六年五月十九日・開校式典挙行（校旗の完成）
昭和三六年六月一日・第二期工事（整地）地鎮祭並びに起工式をあげる。
（陸上自衛隊　竹松駐とん部隊第４施設大隊の全力投入による
　作業開始）
昭和三六年七月二八日・○整地作業完了・○引渡し式　校地三五〇〇坪・
　校舎四四四坪（鉄筋コンクリート２階建て）第一期工事
　職員　校長・古川憲介、教頭・松尾善徳、事務長・堤堅、教諭・
　養護教諭・事務職員・用務員・非常勤講師・校医（合計二三名）
昭和三六年十月　第二期工事　校舎着工

P71・**◎昭和三六年度（１９６１）**

四月十日　入学式
　第一回生の入学式挙行　定員一八〇（男女共学）
　四学級　第一学年入学生一九六名（男子１２７名・女子６９名）
五月十九日　開校式、
　午前十時四十分、開式が松尾教頭によってつげられる。
　佐藤長崎県知事・速見県教育長・斉藤校長・協会長・県議会議員

を始めとし、その他、わが校の創設にご努力下さった方々・多数のご臨席のもと式は希望にあふれて進められ万才三唱のもとでとどこおりなく終る。

七月二二日・二三日　高体連

県下若人の祭典「高体連大会」が行われ、本校からも４５名の選手が緑のスクールカラーもあざやかに、その雄姿を表わし、熱戦をくりひろげた。

・バスケット(男)１１名・バレー(男)１３名・バレー(女)１０名・卓球(男)７名・卓球(女)４名

十一月一日　創立祭

第一回創立祭を行なう・校歌発表。本校講堂に、おいて文化祭が開かれた。人数が少なくて、準備期間も短かかったにもかかわらず、文化講演（元長崎大学学長・古屋野宏平氏）・弁論大会・音楽部のコーラス・美術部の展示など・文化クラブを中心としてかなり充実したものだった。

十二月二日　校内マラソン大会

男子生徒の血を沸かせた第一回校内マラソン大会が、本校公認コース・本校～田手原間．往復約九キロのコースでおこなわれた。

P72・**◎昭和三七年度（１９６２）**

四月八日　入学式・第二回生の入学式挙行。

あいにくの雨にもかかわらず、皆元気に、登校し、南高生としての喜びをかみしめ、ていた。第一回生も初の後輩を向かえてうれしそうだった。

六月三・四日　高体連。

佐世保における高体連に我等は二年目の意気をつぎこんだ。ほとんどの部が緒戦を飾った。我等にとっては意義ある一歩前進だった。いつまでも新設だからということに甘えてはならないが、二年目にしては一つの成果をあげたようだ。出場した種目は次の通り。バレー　男・女、ラグビー、バスケット　男・女、卓球　男・女、陸上

七月二十五日～三十一日　修学旅行

本校にとってはじめての修学旅行であった。長崎―大阪―奈良―京都―東京―長崎のコースで行われた。

参加者は先生五人・生徒五一人（男２８人・女２３人）

台風通過のおかげで霧がかかり、富士山が見られなかったことは、とても残念であったが、楽しい思い出となりました。

十一月一日・二日　創立祭・これで二度目の創立祭である。

第一日　創立祭式典及び文化祭

記念講演　森達雄氏・第二回弁論大会　出場十二名・

演劇部公演～防人遺聞～・展示各部（新聞・文芸・電工・英語・芸術・家庭・生物・化学）※音楽部は、鹿児島である九州大会に出場するため、出演不可能となる。

第二日　体育祭　地区対抗リレー、バレー・卓球、フォークダンス

人数が少なかったためと、運動場の整備がまだできていなかったために、他校のような大きな体育祭をやることができなくて競技会式になりました。

十二月〇日　校内マラソン大会

今年も女性は走らず男生徒の応援。コースは昨年と同様本校～田手原間往復、約九キロで行われた。

P73・74・**◎昭和三八年度（１９６３）**

四月八日　入学式・第三回生の入学式挙行。

これで、わが南校も全学年がそろい他校と同じになったので新設校という言葉に甘えないで、しっかり頑張ろう。

六月　高体連

今大会で最も感じたことは、昨年と比べてより大きく一歩前進したということである。まだ数えて三回目の出場ではあるが、五チームが準々決勝進出にまでいった。出場したチームは、次の通りラグビー、剣道、柔道、卓球(男・女)、テニス、体操、バスケット(男・女)、バレー(男・女)、バドミントン、山岳。

七月二十三日~二十九日、第二回修学旅行

参加者は、職員八名・生徒二〇二名。長崎―大阪―京都―奈良―熱海―東京―長崎、のコースで行なわれた。

今年も去年と同様台風通過にはみまわれなかったが、すごい霧で富士山が見られなかつた。楽しい旅行であったが、最後という日にいやなことがおこり不愉快になってしまった。

十一月一日・二日・三日　創立祭

第一日　落成式

第二日　文化祭

一、開会あいさつ　　五、合気道演技

二、演劇~予告された心中　　六、英語劇~最後の一葉

三、コーラス　　七、ブラスバンド演奏

四、第三回弁論大会　出場者十名　　八、閉会あいさつ

◇展示部門・地学部、茶道部、華道部、生物部、文芸部、電工部、美術部、新聞部、JRC、家庭部。

第三日　体育祭・始めての大きな体育祭をひらく。
やぐらを四本組んでの大熱戦をくりひろげた。

◎昭和三十九年（１９６４）

一月二十五日　校内マラソン大会・今年は女子も初出場で大奮闘。

二月十九日　長崎南高第一回卒業式・

南高第一回生が創設の喜びと苦しみとを胸に、母校を去って行った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

◆七月二十日　みなみ創刊号　発行◆

みなみ　創刊号・長崎南高等学校　生徒会誌　発行

編修後記・P75・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（75）

一冊の本を作るということが、こうも手のいるものだとは思わなかった。本部役員、みんな不慣れなものばかりであったので、この会誌の体裁たるや、つたないものである。あんなものも載せればよかった、こんなものも…と、今になって見ると、我々の力量の不足が悔やまれる。しかしながら、やっと出来た。それも「創刊号」である。第一回卒業生が出た年に、まがりなりにも生徒会誌創刊号を出すことができたことは、意義深いものがある。これで「長崎県立長崎南高等学校生徒会」も一人前になった。他校のどの生徒会にも、ひけをとらないまでに成長した。これから先、この生徒会誌は、何十号、何百号までも発刊されるであろうが、ここにその創刊号ができたことは、会員の皆さんと共に、よろこびでいっぱいです。長崎県立長崎南高等学校生徒会、バンザイ！

第三期　生徒会役員一同

おわび　編集委員　中田　満智子

この長崎南高等学校生徒会誌・創刊号を読んでいただく前に、編集者の一人として、お侘びしておきたいことがあります。

内容をごらんになればおわかりでしょうが、この会誌の内容は、第一回卒業生に贈る会誌として作成したものです。三月中には発刊できる予定だったのですが、本部役員が三月、四月はとても忙しく、印刷所もその頃仕事が多かったのとかで、春休みも毎日出て仕事をしたのにも関らず、発刊が非常に遅れてしまいました。編集者としても、いっそう発刊をやめてしまおうかとも考えましたが、多数の方々から忙しい中を原稿を寄せて戴いたことを考えまして、この度び発刊までにこぎつけました。従って内容的に多少、時期のずれが感ぜられますので、読んでくださる会員の皆さんは、その点をご了承下さい。以上、発刊が遅れましたことのお侘びと重ねまして、皆様の、御了承をお願い致します。

みなみ（創刊号）
昭和三十九(1964)年 七月二十日 発行
編集・責任者・・・・・・ 平野伸人
発行 中田満智子
・印刷所 内外印刷株式会社
長崎市榎津町三三 電話③二五四三
・発行所 県立長崎南高校・生徒会
長崎市上小島町高僧都五五五 電話②九二二五

みなみ・創刊号 ･･･長崎南高生徒会誌･･･

平成も終わりになろうとする今日から 55 年もの昔・昭和 39(1964)年７月に刊行されたこの生徒会誌・創刊号は＜おわび＞にあるように、長崎南高１回生の卒業にその出版が間に合わず４ヵ月の後・７月 20 日になってようやく発行されたのでした。
高校卒業の後、各人それぞれに新生活のスタートの時、自分自身の身辺にもさまざまな変化があり、故郷を離れての生活にはいる人もいたであろう１回生のみなさんが、この創刊号を手にすることは困難であり、その後もずーっとこれまで、目にすることも無かったという話も聞きました。
大変に「遅ればせながら･･･」と思い立って、老いゆくわが身の身辺整理の中で、手元に残っていたこの創刊号を読み返し、自身の若かった頃を懐かしみながら、この復刻に取り組んでみたのです。

長崎南高・旧職員・Ｓ37/４～Ｓ46/3、在任。(発刊当時 28 歳) 山田康弘 復刻
・平成 2019(Ｈ31)３/23・謹写 ＜栃木県鹿沼市在住・満 83 歳＞